



TITLE:

## 三國西晉鏡銘集釋

AUTHOR(S):

「中國古鏡の研究」班

---

CITATION:

「中國古鏡の研究」班. 三國西晉鏡銘集釋. 東方學報 2011, 86: 291-333

ISSUE DATE:

2011-08-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/147958>

RIGHT:

## 三國西晉鏡銘集釋

本稿は紀年鏡銘をのぞく後漢末—三國・西晉代の鏡銘の集釋である。対象とするのは、「九子」や「三王」の銘文をもつ三段式神仙鏡や盤龍鏡などの華西鏡、畫紋帶對置式神獸鏡をふくむ吳鏡、魏・西晉の魏晉鏡、日本出土の三角緣神獸鏡である。表題に「三國西晉鏡銘」と掲げたが、鏡の様式區分としても、銘文の區分としても、漢鏡と三國鏡とを截然と分けることはむずかしい。たとえば、華西鏡はおもに後漢代につくられた。それはあくまで便宜的な時期區分であることを了解されたい。

文献や出典の表記法は「後漢鏡銘集釋」と同じである。本集釋の編集は、吳鏡は森下章司と岡村秀典、三角緣神獸鏡は森下と下垣仁志、そのほかは森下が擔當した。ほかに班員として共同作業に参加されたのは、安藤房枝、諫早直人、金文京、佐野誠子、下垣仁志、原田三壽、廣川守、福田美穂、光武英樹、向井佑介、山泰幸の各位である。

## 「中國古鏡の研究」班

### 一 華西鏡

「九子」や「三王」を特徴とする銘文である。鏡式としては三段式神仙鏡や畫紋帶對置式神獸鏡のほかに盤龍鏡や環狀乳神獸鏡の一部をふくむ。これらの鏡群は「九子」や「三王」のほか、製作者名や特徴のないくつかの語句において共通點が認められる。また、内區や外區の圖像紋様にも共有されるものがある。時期を細かく比定する根據は乏しいが、對置式神獸鏡に建安廿一年・廿四年の紀年銘鏡があることから、中心となる時期は後漢末で、三國代にも一部かかるものと考えられる。

鏡の出土地は、三段式神仙鏡とそれに關連する一群の鏡が四川省を中心に分布し、陝西省にも分布のまとまりがある。これにたいして、畫紋帶對置式神獸鏡は吳の都となった湖北省鄂州市を中心とする長江中流域に集中する。このため、これらは互いに關連する複數の生産系統の製品と位置づけることができ、銘文はその關係をみるうえで大きな手がかりとなる。本章ではおもに三段式神仙鏡とそれ

に關連する一群の鏡をとりあげ、畫紋帶對置式神獸鏡は次章の吳鏡において論じることとする。

# ●華西〇一

黃蓋作竟甚有畏、  
國壽無亟、  
下利二親。

堯賜女爲帝君。  
堯は女を賜ひ、帝君と爲す。

一母婦坐子九人。  
一母婦坐し、子は九人。  
翠蓋覆貴敬坐盧、  
翠蓋は貴を覆ひ、敬みて盧に坐す。

東王父西王母、  
東王父・西王母あり、  
哀萬民兮。  
萬民を哀しむ。

## (注)

湖北省鍾祥市胡集墓出土の三段式神仙鏡にみる。荊州博物館における展示で觀察した。内區を上中下の三段に區切り、下段は建木〔林已奈夫・一九七三〕を挟んで左側に二人の男子の坐像、右側に二人の婦人像をあらわす。中段は左に東王父、右に西王母がある。上段は中央に龜を臺座とした華蓋が廣がり、右側の婦人像を中心に大小九人の人物像が竝ぶ。

銘文は時計回りで、起句の前に錢形記號を置く。七字句を主とする雜言體で、眞部の「親」・「人」・「民」と文部の「君」とが叶韻する。第一句の「黃蓋」は例が少なく、ほかに華西〇八の「黃蓋」環狀乳神獸鏡や華西一〇注の盤龍鏡を知るのみである。「蓋」は第六句の「蓋」と同じ字形であるため、「羊」の繁字ではなく、「蓋」の假借であつた可能性がある。銘文五〇六・七四五の注を參照。「甚有畏」も例をみない。「甚」は「まことに」の意。『戰國策』秦策の

「左右皆曰、甚然。」の高誘注に「甚、謂誠也。」とある。あるいは「謀」の省字または假借。『爾雅』釋詁に「謀、誠也。」とある。「甚」字は漢鏡には少ないが、魏晉鏡や三角緣神獸鏡に頻出する。魏晉〇一の注を參照。「畏」は「威」の假借で、威嚴の意。『尚書』皋陶謨に「天明畏、自我民明威」とあり、『釋文』に「畏、徐晉威、馬本作威。」とある。

第二句の「國壽」は「多賀國家」のように天下太平を祝頌する語であるが、鏡銘としてはほかに例をみない。

第三句は第二句と對になる。「下利二親」は「長保二親」が通例。第四・第七句は圖像内容を表したもの。下段―上段―中段の順に述べている。第四句は「堯帝賜舜二女」の故事を示す。建木の左の男子像が堯と舜に比定され、右が「二女」にあたる。『史記』五帝本紀に「堯乃以二女妻舜」とあり、「爲帝君」は、堯から舜に帝位が禪讓されたことをあらわす。

第五・第六句は上段の圖像の説明。婦人像が「一母婦坐」にあたり、それをとりまく大小の人物と婦人の胸に抱えられた赤子が「子九人」となる。檀山滿照(二〇〇七)は、四川省綿陽市何家山一號墓(華西〇二)および四川省邛崃市文物管理局所藏(華西〇三)の三段式神仙鏡銘をもとに、上段の圖像が母子像であることを推測していた。すなわち、赤子を抱える女性と小さな人物像に着目し、銘文の「九子」と關連づけて「一族の繁榮を象徵する」ものと想定したのである。本銘により、「九子」と圖像との關係がさらに確實なものとなった。「九子」は『楚辭』天問に「女岐無合夫、焉取九子」とあり、王逸注に「女岐神女、無夫而生九子也。」という。『楚辭』の「九子」をめぐる所説は星川清孝(一九七〇・一一二―一三頁)を參照。王仲殊(一九八九)も對置式神獸鏡や三段式神仙鏡の銘に

みられる「九子」をとりあげ、この女岐九子傳説との關係性を想定する。また、『晉書』天文志上には「尾九星、後宮之場、妃后之府。尾亦爲九子、星色欲均明、大小相承、則後宮有敘、多子孫。」とあり、「九子」は後宮を象徵する星座で、子孫が多いことを祝頌する吉祥語となった。鏡銘では、獸首鏡の銘文七一・八・七二〇に「五男四女凡九子」とあるほか、三段式神仙鏡の華西〇二・〇五や對置式神獸鏡の吳〇一・〇二などに「九子作容」や「九子作」として用いられ、漢鏡七期以來の華西系に多くみられる。

第六句の「翠蓋（蓋）」はカワセミの羽を用いた華蓋。華西〇二の注を参照。本鏡では母婦人と九子を覆う華蓋を示している。

第七句は中段の東王父と西王母の圖像を示す。つぎの「哀萬民兮」は東王父・西王母の恩恵が萬民におよぶことをいったものか。

上段の左側の人物像には「大男」「活老」の榜題が記されているが、説話との同定ができない。

●華西〇二

余造明鏡、  
九子作容。  
翠羽秘蓋、  
靈鵝臺杠。  
調刻神聖。  
西母東王。  
堯帝賜舜二女、  
天下泰平。  
風雨時節、  
五穀孰成。

余れ明鏡を造るに、  
九子は容を作す。  
翠羽の秘蓋あり、  
靈鵝は杠を擡ぐ。  
彫刻せるは神聖なる、  
西（王）母・東王（父）なり。  
堯帝は舜に二女を賜ひ、  
天下泰平なり。  
風雨時節あり、  
五穀孰成す。

其師命長。

其の師の命は長からん。

（注）

四川省綿陽市何家山一號墓出土の三段式神仙鏡（何志國・一九九二）にみる（圖一）。圖像構成は華西〇一の鏡と類似する。栖山滿照（二〇〇七）は四川省邛崃市出土の同式鏡とあわせて實物を検討しており、釋文はおおむね栖山にしたがう。銘文は起句の前に錢形の記號があり、四字句を基本とし、陽部の「王」「長」と東部の「容」「杠」と耕部の「聖」「平」「成」が叶韻する。

第一句の「余」は作鏡者の一人稱主語。鏡銘では三段式神仙鏡に限られる。シアトル美術館藏の三段式神仙鏡（樋口・圖版九一・一八三）で「新作明鏡」と讀まれてきたのは「余作明鏡」の誤り。「鏡」字は金偏をつける。



圖 1 華西 02 四川省何家山 1 號墓出土  
[Bagley 2001 : p. 328]

第二句の「容」は圖像を意味し、楯山は上段の母子像に比定した。華西〇一の「一母婦坐子九人」を簡略化した表現である。

第三・第四句は上段にあらわされた華蓋の説明。「翠羽」はカワセミの羽根。緑色で裝飾用品として珍重された。『漢書』西域傳の贊に「聞天馬・蒲陶則通大宛・安息。自是之後、明珠・文甲・通犀・翠羽之珍盈於後宮。」「後漢書」賈琮傳に「舊交趾土多珍產・明珠・翠羽・犀・象・瑇瑁・異香・美木之屬」とある。「臺」は「擡」の省字または假借で、「あげる」の意。「杠」は華蓋の柄の下節。『周禮』考工記・輪人の鄭司農注に「程、蓋杠也。」、孔穎達疏に「蓋柄有兩節、此達常是上節下入杠中也。」とある。また、『晉書』天文志上に「大帝上九星曰華蓋、所以覆蔽大帝之坐也。蓋下九星曰杠、蓋之柄也。」とあり、「華蓋」と「杠」とは大帝の上で對になる星座であつた〔林巳奈夫・一九七三〕。

第五句の「調」は「彫」の假借。「神聖」は吳〇四に「神聖設容」という例がある。第六句の「西（王）母・東王（父）」を修飾するのであろう。本鏡の中段には、向かつて左側に西王母、右側に東王父があり、いずれも龍虎座に坐っている。

第七句のみ六字句となる。華西〇一では「堯賜女爲帝君」とあり、ここでは「二女」を嫁がせた「舜」を示す。楯山は本鏡の下段の圖像がこの句に對應するものとした。

第八句の「泰平」は「太平」に同じ。

第九・第一〇句は七言句の「風雨時節五穀孰」を四言二句に改變したもの。

### ●華西〇三

余造明鏡、

余れ明鏡を造るに、

九子作、

九子は（容を）作す。

上刻神聖。

上に刻むは神聖なる、

西母東王。

西（王）母・東王（父）なり。

堯賜舜二女、

堯は舜に二女を賜ふ。

天下泰平。

天下泰平なり。

禾穀孰成。

禾穀熟成す。

（注）

四川省邛崃市文物管理局藏の三段式神仙鏡〔蘇奎・二〇〇八〕にみる。銘文は「余造明鏡、九子作」・「堯賜舜二女」・「天下泰平」などの語句が何家山一號墓鏡の華西〇二と共通し、圖像も類似する。ただし、本銘では翠蓋にかんする二句を省略し、圖像では東王父と西王母の位置が反對になっている。また、「子」・「二」・「平」などの字形を異にする。「二」は第二劃の兩端を下に曲げ、吳〇五などの「三王」に手法が似る。楯山滿照（二〇〇七）は何家山一號墓出土鏡とあわせて銘文を詳しく検討しており、釋文はおおむねそれにしたがう。四字句を基本とし、耕部の「聖」・「平」・「成」と陽部の「王」とが叶韻する。

第二句末は「容」字を脱落する。ただし、楯山は「作」につづく字を「之」と讀んで「九子作之」とするが、それでは華西〇二の「九子作容」と意味が整合しない。第三句は蘇奎釋の「上刻神聖」が妥當であらう。

第七句の「禾穀」は鏡銘ではめずらしく、華西〇二の「五穀」がふつうである。

### ●華西〇四

九子竟、

九子の鏡は、

清而明。 清にして明なり。  
利父母、 父母に利し、  
便弟兄。 弟兄を便んず。

(注)

陝西省西安市咸寧路出土の三段式神仙鏡（西安・六〇）にみる。半圓方形帶の方格に一字ずつ銘文をいれる。圖録は「清而明」を起句として讀むが、陽部の「明」・「兄」が韻をふむ三言句の隔句押韻である。

第一句末を圖録は「昌」と讀むが、「竟」の誤り。

第三句の「利」は、便宜。『國語』魯語下の「唯子所利」に韋昭注は「利、猶便也。」という。第四句の「便」は、安んずる。『說文』八上に「便、安也。」とある。この第三・第四句は對になり、重圈銘帶鏡の銘文四一〇に「利貳親、宜弟兄」、獸首鏡の銘文七一七に「便姑章、利父母」という類似句がある。

西安市常家灣一號墓の三段式神仙鏡（西安市文物保護考古所・二〇〇九・圖一九二）は、方格に二字ずつ銘文をいれ、本銘の四句に「夫妻相。宜長保。君長生。樂未央。」の四句を加える。「夫妻相」は銘文五一に「夫妻相保如威史兮」という用例がある。

# ●華西〇五

九子明竟、	九子の明鏡、
幽涑三岡。	三剛を幽鍊せり。
巧工刻之周文、	巧みなる工は之れを刻み、文（章）を彫る。
上有四守吉昌。	上に四獸有り、吉昌ならん。

(注)

上海博物館藏の三段式神仙鏡（上海・六四）にみる。内區外周に

半圓方形帶をめぐらし、方格に二字ずつ特徴的な字形の銘文をいれる。「岡」・「昌」が陽部で押韻する。

第一句の第一字を圖録は「八」と讀むが、華西〇四などの用例からみて「九」字であろう。吳〇二の「九」も字劃の左上の交叉部分からの張りだしはわずかであり、この字との差はない。

第二句の「三」は九〇度回轉した「川」のような字形となつていゝるが、この鏡群によくみられる「三」字。「岡」は「剛」の省字で、「三剛」は「三商」と同じく三種の堅強な金屬をいう。銘文七三〇の注を參照。「三岡（剛）」は延熹七年（二六四）獸首鏡（五島・三以降に出現し、とくに華北の神獸鏡によくみられる。

第三句は銘文五〇一などの「巧工刻之成文章」を繼承し、その下三字を「周文」としたものの。「周」は「彫」の省字または假借。

第四句の「守」は「獸」の假借（林巳奈夫・一九七八）。

和泉市久保惣記念美術館に所藏する獸首鏡の銘文七三〇（久保惣・三七）は、第四句までが「吾作目竟、幽涑三岡。巧工刻之成文章。上有四守辟羊。」となり、本鏡と近い關係にあることがうかがえる。

# ●華西〇六

余造明鏡、	余れ明鏡を造るに、
三王作容。	三王は容を作す。
翠羽秘蓋、	翠羽の秘蓋、
靈鵝臺杠。	靈鵝は杠を擡ぐ。
倉頡作書、	倉頡は書を作り、
以教後生。	以て後生に教ふ。
燧人造火、	燧人は火を造り、





圖2 華西06 西安市未央區出土（西安61）

五味。

五味（生ぜり）。

（注）

陝西省西安市未央區出土の三段式神仙鏡（西安・六二）にみる（圖2）。紋様・銘ともに模糊としているほか、鈕座は改作された形跡があり、後世の踏み返し鏡の可能性がある。銘文は起句の前に銭形紋があり、整った四言二句で、「容」・「杠」・「生」が東部で隔句押韻する。第四句までは華西〇二と類似する。

第一句の第三字は潰れているが、圖録の釋にしたがう。

第二句の上二字を圖録は未讀だが、「三王」。「王」字は下の横劃兩端をS字・逆S字形に屈曲させた「三王」銘の鏡群に特徴的な字形である。「三王」は『孟子』告子の趙岐注に「三王、夏禹・商湯・周文武也。」とあり、三代を開いた王とする。『史記』秦本紀・

孝公十九年條の「天子致伯」に『正義』は桓譚『新論』を引いて「夫上古稱三皇・五帝、而次有三王・五伯、此天下君之冠首也。故言三皇以道理、而五帝用德化、三王由仁義、五伯以權智。」と注し、五帝につづく存在とされるいつぼう、相和歌辭の「王子喬」（『樂府詩集』卷二十九）には「三王五帝、不足令。」とあって「三王」と「三皇」とが混同されることもある。ただし、華西〇二の第二句に「九子作容」とあり、「九子」の圖像を示したものと解釋したが、本鏡には「三王」の圖像があらわされていない。そのかわり本銘に「倉頡」と「燧人」の事績が記され、下段にはその二聖人の圖像があらわされていることから、本鏡の作者は文明をもたらした聖人を「三皇」または「三王」とみなしていたのかもしれない。なお、「九子」と同じように、つぎの華西〇七や吳〇五・〇六には「三王作」とあり、「三王」はそうした聖人にちなむ作鏡者の商號にもなった。また、對置式神獸鏡の吳一三に「五帝三王」とあるのは、「五帝」と併記された希有の例だが、語順からみて「五帝」につづく「夏禹・商湯・周文武」をいうのかもしれない。

第三・第四句は華西〇二と同じで、上段の内區圖像を表現したものの。第四句を圖録が「靈孺臺□」と讀むのは誤り。

第五・第八句は内區下段にあらわされた「倉頡」と「燧人」の事績を示す。後漢の徐幹『中論』治學に「倉頡視鳥迹而作書」・「燧人察時令而鑽火」とある。「倉頡」は黃帝の臣で鳥の足跡をみて文字を創出したと傳える。第五句の第四字を圖録は未讀だが、「書」であろう。第五・第六句は李斯『蒼頡篇』の冒頭「蒼頡作書、以教后嗣」にならったもの。下段左側に鳥の前で文字を書いている圖像が「倉頡」にあたる。「燧人」は『風俗通義』皇朝に引く「禮緯含文嘉」に「燧人始鑽木取火、炮生爲熟、令人無復腹疾、有異於禽獸、

遂天之意、故曰遂人也。」とあり、伏羲・神農と並ぶ「三皇」の一人とされる。「五味」は鹹・苦・酸・辛・甘。「燧人」の發明した火の利用によって多様な調理法が生まれたことをいう。下段右側の二人が坐って對面する圖像がこれに該當する。

●華西〇七

三王作竟、  
調刻容見。

左右龍席、  
除□不羊。

服者長生。  
其師萬福。

(注)

三王 鏡を作るに、  
彫刻して容現はる。  
左右に龍虎あり、  
不祥を除□す。  
服する者は長生せん。  
其の師は萬福ならん。

古鏡・中二七裏の盤龍鏡にみる。内區は盤龍紋の外側に方格と鳥獸や羽人をめぐらせた獸紋帯があり、櫛齒紋をはさんで外區は雲紋となる。銘文は田字形に區畫した方格のなかに四字句をいれる。押韻についてカールグレン(K・二五〇)は言及していないが、元部の「見」と陽部の「羊」と耕部の「生」が叶韻した可能性がある。

第一句をカールグレンは「吳□作竟」と讀んだが、前の華西〇六と同じく「三王」の裝飾文字で(圖3)、ここでは二字とも下の横劃兩端がS字・逆S字形に屈曲している。華西〇六の注に記したように、これは「三王」を商號とする鏡工の制作である。嘉禾二年(二二三)重列式神獸鏡には「五帝作竟」とあり、作鏡者を示す獨特の表現として共通する。

第四句の第二字は讀めないが「辟」の異體字か。  
「三王作」・「調刻容見」・「其師萬福」などの語句は、類似表現が

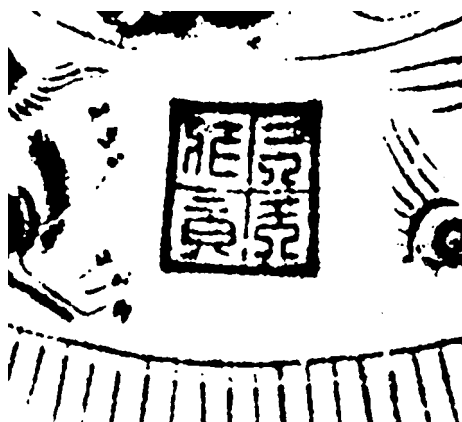


圖3 華西07(古鏡・中27裏)

三段式神仙鏡や對置式神獸鏡にもあり、この型式の盤龍鏡とのつながりを示す。また、巖窟二下・七四の方銘盤龍鏡は本鏡と類似した圖像紋様をもち、その銘文には「三王善作明鏡」とある。

●華西〇八

黃蓋作鏡、  
幽凍金商。  
其師命長。

(注)

黃蓋 鏡を作るに、  
金商を幽鍊せり。  
其の師の命は長からん。  
陝西省長武縣出土の環狀乳神獸鏡(馬詠鐘・一九八八・圖二・三)にみる(圖4)。半圓方形帶の方格に一字ずつ銘文をいれる。「商」・「長」が陽部で押韻する。



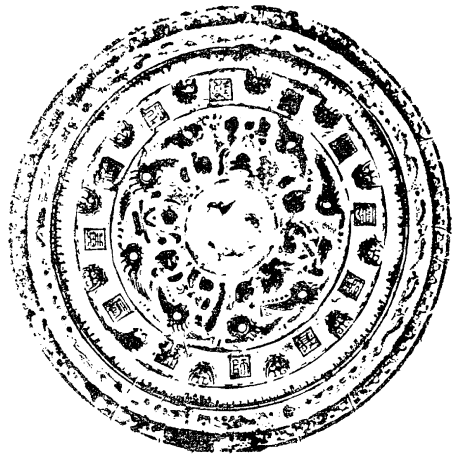


圖4 華西08 陝西省長武縣出土  
〔馬詠鐘1988・圖3〕

第一句の「黄蓋」は華西〇一の三段式神仙鏡や盤龍鏡の一部に例がある。上野祥史〔二〇〇〇〕は「青蓋」と「黄蓋」の環狀乳神獸鏡が華北西部から、「青蓋」盤龍鏡が漢水上流域から出土することあげ、いずれも「青蓋」工房で制作されたと推測する。なお、報告では第四字を「竟」と讀むが「鏡」の誤り。

第二句は「幽凍三商」がふつう。「金商」は同向式神獸鏡の銘文七四二や對置式神獸鏡の一部（善齋・甲六五）にみる程度。銘文七四二の注を参照。ほかに「巧工作竟、幽凍金岡」銘をもつ西安市未央區出土の環狀乳神獸鏡（西安・五八）や「吾作明竟、幽凍金岡」銘をもつ陝西省鳳翔縣出土の環狀乳神獸鏡（昭明・一九九五）は、いずれも簡略化した内區圖像と銘文の特徴的な用語が共通し、陝西省に分布がとまる。

# ●華西〇九

陰氏作竟、 陰氏鏡を作るに

青如日月。 清にして日月の如し。

其師受。 其の師は壽ならん。

〔注〕

巖窟二下・七と故宮・五八の環狀乳神獸鏡にみる。簡略化した圖像表現は華西系神獸鏡の特徴を示し、縁部の線表現の菱雲紋も獨特である。銘文は半圓方形帶の方格に一字ずつ時計回りにいれる。

第一句の「陰氏」はほかに黄初二年（二二二）同向式神獸鏡に「楊州會稽山陰師蔭（陰）豫」という例がある。『後漢書』陰識傳に「宣帝時、陰子方者、至孝有仁恩。臘日晨炊而竈神形見。子方再拜受慶。家有黄羊、因以祀之。自是已後、暴至巨富、田有七百餘頃、與馬僕隸比於邦君。子方常言、我子孫必將疆大。至識三世而遂繁昌、故後常以臘日祀竈、而薦黄羊焉。」とある。『荆楚歲時記』十二月八日條にも「黄羊陰氏」が竈神としてまつられ、その信仰は民間にも浸透していた。華西一〇にみるように、「黄羊」は鏡の製作者名としても多く登場しており、富貴にかかわる吉祥語として當該地域の工房名に採用された可能性がある。あるいは竈神をふくめた火の象徴として鑄造の吉祥語となったのかもしれない。

第二句の「青如日月」はめずらしい。「青」は「清」の省字または假借。

第三句の「受」は「壽」の假借（李新城・二〇〇六・二二六頁）。熹平三年（一七四）獸首鏡に「延年益受」、魏晉〇二に「買者受」という例がある。また、『史記』呂后本紀に「齊丞相齊壽爲平定侯」とある「齊壽」を『史記』惠景間侯者年表や『漢書』高惠高后孝文功臣表は「齊受」とする。

●華西一〇

黃羊作鏡明而光。

巧工所造成文章兮。

交龍戲守轉相從。

能常服之、

爲者命長。

(注)

黃羊鏡を作るに、明にして光なり。

巧みなる工の造る所にして、文章を成す。

交龍・戲獸は轉いよいよ相ひ從ふ。

能く常へに之を服せば、

爲る者の命は長からん。

故宮藏鏡・七〇の盤龍鏡にみる。一頭の龍形を表現した特異な内區の圖像をもつ。内區に「服者」の方格銘をいれるのも特徴。外區に時計回りにめぐらされた銘文は、陽部の「光」・「章」・「長」と東部の「從」が叶韻する。

第一句の「黃羊」は獸帶鏡や盤龍鏡に多くみられる作鏡者。華西〇九の注を參照。また、山東省蒼山縣柞城から出土した元和四年(八七)銅壺(劉心健ほか・一九八三)には「江陵黃陽君作」の刻文があり、「黃羊」は「黃陽」の假借であつた可能性がある。「明而光」は前漢鏡銘に一般的である。

第二句の「所造」は盤龍鏡の銘文五二八に「尙方名工、杜氏所造」とあり、鄂州市鄂鋼邵家灣第二號墓出土の盤龍鏡(鄂州・七四)に「八公所造」とある。

第三句の「戲守」は本鏡と三角緣神獸鏡(京大目録五八・六一・六二・八二)の「上有戲守及龍虎」以外に例がない。林巳奈夫(二九七三)は「奇獸」に讀みかえたが、本例からみると「戲獸」と理解してもよいだろう。「轉相從」もめづらしい。「交龍戲守轉相從」はあるいは内區圖像の龍の姿を表したものかもしれない。

第五句の「爲者」はめづらしい用語だが、作鏡者をいうのだろう。

同様の内區圖像と方格銘をもち、外區紋樣の特徴から華西鏡ととらえられる盤龍鏡に陝西省城固縣文化館藏の盤龍鏡(鄭榮・一九八八)があり、つぎの銘文をいれる。

黃蓋作竟大母傷。左龍右帛壁不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親兮。

「黃蓋作」は三段式神仙鏡の華西〇一や環狀乳神獸鏡の華西〇八にも例がある。

二 吳鏡

ここでは「九子」と「三王」の銘文をもつ畫紋帶對置式神獸鏡と建安年間に吳の地域で成立した重列式、同向式、對置式など各種の神獸鏡の銘文をとりあげる。前者は華西鏡と密接な關係をもち、外區に畫紋帶をめぐらせ、銘文は半圓方形帶の方格に一〇二字ずついれるのたいして、後者の神獸鏡はいずれも外區に銘帶をめぐらせている。對置式神獸鏡には建安廿一年・廿四年の紀年銘鏡があり、その出現年代も後漢末にさかのぼる。

吳鏡には紀年をいれた長文の銘文が多いが、ここでは紀年銘のない神獸鏡の銘文を對象とする。銘文は型式が一定せず、文字や語意の讀みとりの困難なもの、記號化したものも多い。

●吳〇一

九子作竟自有紀。九子鏡を作るに、自づから紀有り。富吳矣。吳けいに富むなり。

(注)

安徽省舒城縣八里雲霧村出土鏡(六安・一〇五)にみる。圖像配置

は環狀乳神獸鏡に近いが、神獸像の表現は畫紋帶對置式神獸鏡と共通する。鈕上に線刻がある。

第一句の「九子」については華西〇一の注を参照。

第二句の「昺」は、光ること、ないしは光があらわれること。

『説文』十上に「昺、見也。」とあり、『集韻』に「昺、光也、或作耿。」とする。

# ●吳〇二

九子竟與衆異、

九子の鏡衆と異なる。

服者命長。

服する者の命は長からん。

(注)

湖北省鄂州市寒溪公路出土の畫紋帶對置式神獸鏡（鄂城・一〇二）の方格銘にみる。圖録では「九日員眼象 異服者命長」と讀むが、寫眞を検討し、上記のように改めた。

第一句の「九子」は吳〇一などと同じく製作工房名を示す。「與衆異」は銘文五四四・五四五・五四六に既出。ふつうの鏡とはちがって、めずらしいという意味。

「九子」からはじまる銘文の畫紋帶對置式神獸鏡には以下の例がある。三字句＋三字句と四字句前後を組合せて構成する。

九子竟明清公。服富貴宜侯王。（小校一五・六九、奇觚一五・三）

九子作世而尙、服者吉利。（鄂城・九五）

九子作明如光。服者侯王。（京都府椿井大塚山古墳出土）

# ●吳〇三

吳郡趙忠所作、  
象聖。

吳郡趙忠の作る所にして、  
聖を象る。



圖5 吳03（古鏡・中28裏）

(注)

古鏡・中二八裏と小校一五・五三裏下の畫紋帶對置式神獸鏡にみる（圖5）。王仲殊（一九八六）は「吳郡趙忠、□作衆□」と四字句に讀むが、銘末の一字をのぞいて小校の釋にしたがう。

第一句の「吳郡」は後漢の永建四年（二二九）に會稽郡の北部を分割して設置され、吳縣を郡治とする。建安六年（二〇一）には孫權が討虜將軍として吳縣に駐屯し、吳の實質的な都となる。環狀乳神獸鏡の銘文七四三に「吳郡胡陽張元公」、重列式神獸鏡の銘文七四四に「千出吳郡、張氏元公」、太康二年（二八二）對置式神獸鏡に「吳郡工清羊造作」（五島・六三）とあり、漢末から銅鏡生産の中心地のひとつであった（王仲殊・一九八五）。「趙忠」は作者の氏と名を記すめずらしい例のひとつである。後漢末期に大長秋の位に昇った

宦官が同姓同名だが、河北安平の出身で一八九年没とされるから、「吳郡趙忠」とは別人である。

第二句の第二字「象」は、かたどる。第二字を小枝は「照」と讀むが、その字形とつぎの吳〇四に「神聖設容」とあることをふまえれば、「聖」字であり、本鏡の圖像をいうのであろう。

# ●吳〇四

吳造明鏡、

神聖設容。

吳明鏡を造るに、  
神聖は容を設ける。

服者卿公。

服する者は卿公とならん。

(注)

湖北省鄂州市塗鎮公社毛壩大隊出土の畫紋帶對置式神獸鏡(鄂城・九六)の方格銘にみる。鈕上に線刻の紋様がある。「容」・「公」は東部で押韻する。

第一句の「吳」は「吳郡」と記さないことから「吳縣」か。

第二句の「神聖」は鏡銘には少ないが、華西〇二には「調刻神聖、西母東王」、同〇三には「上刻神聖、西母東王」とあり、具體的には圖像にあらわされた西王母と東王父をいうのであろう。この句は華西〇二の「九子作容」や同〇六の「三王作容」と同類の語句である。

# ●吳〇五

三王作鏡明而青。

三王 鏡を作るに、明にして清なり。

服者宜先皇。

服する者は先皇に宜し。

(注)

湖北省鄂州市鄂鋼五四四工地出土の畫紋帶對置式神獸鏡(鄂城・

一〇三)の方格銘。圖録では「天下作鏡明而清、服者宜先皇」と讀むが、圖録の寫眞により改めた。耕部の「青」と陽部の「皇」とが叶韻する。

第一句の「三王」は裝飾化された文字となっているが、梁上椿は巖窟二下・七四の盤龍鏡について「三王」と讀んだ。畫紋帶對置式神獸鏡の吳〇六や盤龍鏡の華西〇七などにも同じような字形の「三王」がみられる。ただし、前者の銘とは「王」の字形が異なる。「三王」は華西〇六の注を参照。

第二句の「先皇」は、ふつう先の皇帝を意味するが、鏡銘としては通じにくい。笠野毅(一九九三a)は「先」を「弟」、「皇」を「兄」の假借とし、「宜弟兄」と讀む。「宜弟兄」は銘文四一〇にあり、華西〇四には「便弟兄」とあるが、音韻上は無理がある。あるいは「先」を「光」字と釋し、「皇」は「煌」の省字とみることも可能か。

# ●吳〇六

三王作竟自有意。

三王 鏡を作るに、自づから意あり。

服者宜光九卿吳子。

服するものは光に宜しく、九卿、五子なり。

(注)

陳介祺・下一五五の畫紋帶對置式神獸鏡にみる。「意」・「子」は之部で押韻する。「三王」は吳〇五と同じく下部に裝飾をつけた文字。句のはじまりを判斷しにくい、ここでは「吳子」を「吾子」または「五子」の假借とみた。ただし、「子」は「兮」の可能性もある。「宜光九卿」の意味はとりにくい。あるいは「九卿をかがやくすに宜し」と解釋すべきかもしれない。

同様に「三王作」から銘文がはじまる畫紋帶對置式神獸鏡に、陳介祺・中一三五がある。方格に二字ずつ銘をいれるが、第二句の

「衆異」をはじめとして脱字が多く、韻もふんでいない。

三王作竟、三王鏡を作るに、

衆異宜侯。衆と異なり、侯に宜し。

服者公侯。服する者は公侯ならん。

其師萬福。其の師は萬福ならん。

辟除不羊。不祥を辟除す。

●吳〇七

五月五日大歲丙午、

五月五日 大歲は丙午にあり、

吳郡鄭曼作明鏡、

吳郡の鄭曼 明鏡を作るに、

幽涑三商。

三商を幽鍊せり。

□□□□、

□□□□、

百牙舉樂、

伯牙は樂を舉ぐれば、

衆神見容。

衆神 容を現はす。

天禽。

天禽あり。

(注)

小校一五・一六の同向式神獸鏡の外區銘。ほかに王仲殊(二九八六)が古鏡・中二九表の拓本をもとに釋讀している。時計盤で五時の位置にある「五月」から時計回りに銘文がめぐり、末句は「天禽」の二字で終わる。第一・第二句は紀時と製作者名で、第三句から四字句となる。陽部の「商」と東部の「容」が叶韻する。

第一句の「五月五日」は、鑄造の吉日である「五月丙午」の午日と五日とが混同されたものである。ほかに銘文七三九の「五月五日丙午日中時」があり、その注を参照。その後ろを小校は「大歲武□」と讀み、王仲殊は「大□□□」とする。古鏡の拓本をみると「大歲」は確かであり、その後ろ二字は「丙午」であろう。紀年鏡

で「大歲」を記すことは中平四年(一八七)が最初で、本鏡は圖像の様式からみて三世紀前半の吳鏡と考えられるから、大歲が「丙午」にある黃武五年(二二六)の制作と推測する。

第二句の「鄭曼」は鏡工の姓と名。「吳郡」に出自することを行う。「吳郡」の鏡工にはほかに銘文七四三の「吳郡胡陽張元公」や吳〇三の「吳郡趙忠」などがある。

第四句は小校・王仲殊とも未讀。

第五句を小校は「□長樂□」、王仲殊は「白□□樂」と讀む。拓本では「百牙舉樂」と讀める。

第六句は王仲殊の釋が妥當である。「百牙舉(陳)樂、衆神見容」は鏡銘における慣用の對句である。

第七句は本來「天禽竝存」となる。鈕の上下に配置された伯牙と黃帝には、それぞれ兩側に鳥があらわされている。

内區の半圓方形帶には方格に一字ずつ「吾作明幽竟涑三商周□□」という銘文がはいるが、「竟」と「幽」とが倒置している。

●吳〇八

王言昔者見、王言へらく、昔に見る、  
東方之光。東方の光を。

日月之明。日月の明なり。

西方是火光。西方は是れ火の光なり。

南方金色、南方は金色、

北方水清。北方は水の清なり。

中英主作。中央は主作<sup>た</sup>つなり。

(注)

湖北省鄂州市排灌站田魯灣出土の同向式神獸鏡(鄂州・二二六)の



外區銘。同型鏡が同市蓮花村戴家山から出土している（鄂州・二二七）。四字句を主とする銘文は、時計盤の一一時の位置から時計回りにめぐり、陽部の「光」・「明」・「光」と耕部の「清」が叶韻する。陽部と耕部の叶韻は銘文四〇二などに前例がある。

第一句を「王言」で書きだし、五行で方位を説くのは、鏡銘ではきわめて異例である。鄂州市碧石家具廠出土の建安廿二年（二二七）重列式神獸鏡（鄂州・一四五）に「有今人言余日光」とあるのがこれに近い。

第四・第五句を鄂城・一〇七は「西方金色、南方是火光」の誤鑄とする。五行の配當から、したがうべきであろう。

第七句の第二字を圖録は未讀だが、「英」で「央」の繁字である。「作」は、起つ。『尚書』周書・無逸の「作其卽位」を傳は「起其卽王位」という。

# ●吳〇九

丁木公立土、

丁さかんなる木公 土に立ち、

丁女共氏左日也。

丁女なる共氏は日を左ひだりくるなり。

天下大樂無復憂。

天下大樂にして、復た憂ひ無し。

日月光明何同火。

日月の光明、何ぞ火と同じからん。

二千萬里□□□、

二千萬里□□□、

吉祥旦兮。

吉祥の旦なり。

（注）

湖北省鄂州市鄂鋼子弟小學出土の同向式神獸鏡（鄂州・二二九）の外區銘。時計盤の八時の位置から時計回りにめぐる。第三句から第五句までが七字句であるが、押韻していない。

第一句を圖録は「□禾□□土」と讀むが、「丁木公立土」であろ

う。「丁」は、さかん。『史記』律書に「丁者、言萬物之丁壯也。」とあり、『白虎通』卷四「五行」に「丁者、強也。」という。ただし、第二句第一字の「丁」と字形が異なり、「巧」字かもしれない。「巧」は「善」の意。『詩經』小雅・雨無正に「巧言如流」とあり、鄭箋に「巧、猶善也。」という。圖録釋の「禾」は「木」の誤り。「木」は五行の方位では東にあたり、六朝代に「木公」は東王公の別名にもなる。陶弘景『眞誥』卷五に「昔漢初有四五小兒、路上畫地戲、一兒歌曰、著青裙、入天門、揖金母、拜木公。到復是隱言也、時人莫知之、唯張子房知之。乃往拜之、此乃東王公之玉童也。所謂金母者、西王母也。木公者、東王公也。仙人拜王公揖王母。」（『太平廣記』木公傳・張子房傳に同じ）という。「土」は大地で、五行の方位では中央に配する。あるいは、「土」字は寫眞では「金」のようにもみえ、「木」が「金」に勝るといふ五行相剋を説いたものかもしれない。

第二句の「丁女」は、「丁木公」と對になる歳ざかりの女。「丁」は五行の火にあたり、唐・韓愈『東雅堂昌黎集注』卷四「古詩」の「女丁婦壬傳世婚」の注に「洪慶善曰、丁火也、壬水也、火女也、水男也。丁女而爲婦於壬、故曰女丁婦壬。一作夫丁婦壬、亦通。夫丁者壬也、言壬爲丁夫也、婦壬者丁也、言丁爲壬婦也。今按丁爲陽中之陰、壬爲陰中之陽。故言女之丁者爲婦於壬、以見水火之相配。今術家亦言丁與壬合。洪氏二說皆是。」とある。「共氏」は、百工のことを掌り、天神でもある「共工」にちなむ姓か。「左」は、たすける。末二字を圖録は「已亡」と讀むが、「日也」であろう。

第三句の下三字を圖録は「無懷、復」と讀むが、「無復憂」であろう。銘文三一二に「樂母有事」・「無憂患」という類似句がある。

第四句を圖録は「日月光明□□」と讀む。末字は「同火」の合文

であり、ここでは「何同火」と三字に釋す。

第五句を圖録は「二千東章□□□」と讀むが、上四字は「二千萬里」であろう。建寧元年（二六八）獸首鏡に「八千萬里」という例がある。

第六句は圖録釋による。「羊」は「祥」の省字または假借。

半圓方形帶の方格に一字ずつ計一一字の銘文があるが、圖録は「吉」の一字しか讀んでいない。

# ●吳一〇

王立青赤大竟、

日月同光。

三星別出、

吉羊。

宜公美、

富昌。

月日主天、

可足□□也。

王青赤の大鏡を立つるに、

日月と同光ならん。

三星 別れ出でなば、

吉祥ならん。

公美に宜しく、

富昌ならん。

月日は天を主り、

□□に足る可し。

（注）

湖北省鄂州市梁子湖鄭家山二號墓から出土した對置式神獸鏡（鄂州・二三四）の外區銘。圖録は句點をほどこさず、「青赤大竟日月同光三星永出吉羊宜公美富昌月日萬夫百足不老也王」と釋讀した。銘文のはじまりは不明だが、助辭の「也」を銘末としておくのが妥當であろう。「也」を銘末に置く例として黃龍二年（二三〇）「師鮑氏」同向式神獸鏡があり、制作年代も近いからである。四字句を主とする雜言體で、「光」・「羊」・「昌」が陽部で押韻する。

第一句の第二字を圖録は讀み落としているが、「立」であろう。

吳〇九第一句の「立」も字形が近い。「青赤」は太陽をとりかこむ氣をあらわし、ひいては太陽そのものを象徴する。『漢書』天文志に「青赤出陽道、白黑出陰道」とあり、『晉書』天文志中には「青赤氣抱在日上、小者爲冠、國有喜事。青赤氣小而交於日下爲纓、青赤氣小而員、一二在日下左右者爲紐。青赤氣如小半暈狀、在日上爲負、負者得地爲喜。」とある。また、銘文四〇二に「五色盡具正赤青」という用例がある。

第二句の類似句として『淮南子』俶眞訓の「能游冥冥者、與日月同光」があり、高誘注に「光、明也。諭德道者、能與日月明也。」という。また、延熹八年（一六五）の「老子銘」（『隸釋』卷三）には「同光日月、合之□星」という類似句がある。

第三句の「三星」は三つの惑星、あるいは星宿の「參星」ないしは「心星」。『詩經』唐風・綢繆に「三星在天」とあり、毛傳に「三星、參也。在天、謂始見東方也。男女待禮而成、若薪芻待人事而後束也。三星在天、可以嫁娶矣。」鄭箋に「三星、謂心星也。」とある。惑星の三星が集まれば騷亂など不吉なことが起こると考えられ、『續漢書』天文志中に「三星合、内外有兵」、「晉書』天文志中に「太元十七年：十二月癸酉、填星去、熒惑・歲星猶合。占曰、三星合、是謂驚立絕行、内外有兵喪與饑、改立王公。」とある。

第四句の「羊」は「祥」の省字または假借。「吉祥」のほかに二字脱字があるのだろう。

第五句の類似句として黃初二年（二二二）同向式神獸鏡に「秩公美」、黃武五年（二三六）重列式神獸鏡に「位至公美」とある。その注を参照。あるいは「美」は「侯」の譌字か。

第七句の下二字を圖録は「萬夫」とするが、「主天」の誤釋。「月日」は、時間や年月を意味するが、これは「日月」の錯簡か。

第八句を圖録は「百足不老」と讀む。第一字は「一」・「口」にしたがう「可」字であるが、第三・第四字は讀めない。  
半圓方形帶の方格に一字ずつ銘文があり、圖録は時計回りに「王公可三月□□木□國」と讀むが、その意味は解しがたい。

# ● 吳 一

山陰中北陽里、  
鏡師任皇所作、  
宜用、  
使人高明富貴、  
君子自進言、  
如有買竟者、  
屬以相聞、  
買常若□。  
買道□大吉、  
天下書民、  
吳今言天下大□。

山陰の中北陽里、  
鏡師の任皇の作る所なり。  
宜しく用ふれば、  
人をして高明富貴なら使む。  
君子自づから進めて言ふに、  
鏡を買ふ者有るが如きは、  
屬なり以て相聞せん。  
買へば常へに□の若し。  
買へば道□にして大吉ならん。  
天下 民に書す、  
吳は今 天下大□と言ふ。

## (注)

湖北省鄂州市鄂鋼五四四工地五四號墓の對置式神獸鏡（鄂州・二二八）の外區銘。圖像紋様は建安廿四年鏡に類似し、近い時期の作品と考えられる。銘文は未讀字が多く、圖録は「買竟者□□□」を起句として讀むが、雜言體で押韻が不明のため、ここでは作鏡者の出自を記したところを起句として讀む。

第一句を圖録は「□□中北像里」と讀む。未讀の二字は「山陰」で、「像」は「陽」の誤釋である。「山陰」は會稽郡の治所が置かれた山陰縣。鄂州市出土の黃初二年（二二二）同向式神獸鏡に「楊州

會稽山陰師蔭豫所作竟」、黃武六年（二二七）重列式神獸鏡に「會稽山陰作師鮑唐竟」という銘文があり、漢末から吳にかけて「會稽山陰」は各種の神獸鏡をさかんに制作していた。ただし、鄂州市出土の建安廿一年（二二六）對置式神獸鏡には「會稽所作」とだけあり、本銘では「山陰」の前に「會稽」の二字はなく、圖録は「□人」と釋し、ここでは「大□」と讀んで末句にいたれた。「中北陽里」は縣内の地名。作鏡者に關係する「山陰」の里名として、ほかに黃武五年（二二六）同向式神獸鏡の「楊州會稽山陰安本里」がある。

第二句を圖録は「鏡、租任皇所作」と讀むが、「租」は「師」字が左右反轉していたための誤釋である。作鏡者の前に「師」を冠する例は多く、上述の黃武六年鏡には「作師」とあるが、「鏡師」はめずらしい。作鏡者の「任皇」も初出である。「任」姓はいまの山東省濟寧市に所在した先秦時代の任國に由來する。

第三・第四句を圖録は「官用使卜、高明富貴」と讀むが、「官」は「宜」の、「卜」は「人」の誤釋であろう。「高明」は、位が高く權勢のある人。『尚書』周書・洪範に「無虐瑩獨、而畏高明」とあり、『正義』に「高明、與瑩獨相對、非謂才高、知寵貴之人位望高也。」とある。

第五句を圖録は「君子□言□□」と釋すが、「言」の前に「自進」の二字がある。

第六句を圖録は起句とするが、「買」の前に「如有」の二字がある。これは女性の購買者に鏡の效能を記した文言であろう。

第七・第八句を圖録は「□□□、富貴常在」とするが、未讀字は「屬以相」で、「富」は「聞」の誤釋であろう。「屬」は、ちかづく、つらなる。『漢書』張良傳の「天下屬安定」に顏師古は「屬、近也。」と注する。「相聞」は、互いに音信を通じること。

第九句以下を圖録は「賈□□□去吉恭下□□白民吳今□□人」と釋した。ここでは寫眞から上のように讀んだが、未讀字があり、問題を残している。

半圓方形帶の方格には一字ずつ銘文があり、圖録は「圭子用丰日丰丰三用天日丰」と釋したが、意味が通じない。

鄂州市鄂鋼工地採集の同向式神獸鏡（鄂州・二三七）は、本鏡に類似した半圓方形帶をもち、四分の一ほどを缺失するが、外區銘にも「日君宜竟、富貴高明、日月、君子今亦自明、吾人相得・「所有買竟者、屬以相」という類似の語句がある。また、鈕上には「都尉蔣睿吏張昭竟」の針刻があり、本鏡は兵士の所有物であった。

## ●吳一二

吾人作上竟、

照下象日月、

□□青□□已也。

丰日月之光自有□、

□長之中不可烹。

（注）

湖北省鄂州市鄂鋼六三〇工地出土の同向式神獸鏡（鄂州・二四〇）の外區銘。銘文は時計盤で九時の位置から時計回りにめぐる。未讀字があるため、押韻は不明である。

第一句の下二字は不鮮明だが、圖録釋にしたがう。「吾人」は鏡銘ではめずらしいが、鄂州・二三七の同向式神獸鏡に「吾人相得」という例がある。

第二・第三句を圖録は句讀せずに「照下采昌□□青龍□□已□」と讀む。「照下」は不鮮明なため圖録釋にしたがう。圖録釋の「采」

吾人 上なる鏡を作るに、

下を照らすこと日月を象る。

□□青□□已。

丰なる日月の光、自づから□有り。

□長の中、烹ぶ可からず。

は「象」の誤讀であり、「昌」は「日月」の合文である。類似句に

銘文四四三の「昭于宮室日月光」がある。第三句の「青」字は確かだが、「龍」字は讀めない。未讀の末字は「也」である。

第四句を圖録は「在日月之上」と釋すが、第一字は「丰」、末字は「光」である。「丰」は、さかんなさま。『說文』六下に「丰、艸盛丰丰也。从生上下達也。」とある。草の葉と根がさかんに伸びるさまをいう。また、『詩經』鄭風の篇名に「丰」があり、「子之丰兮、俟我乎巷兮」に毛傳は「丰、豐滿也。」として女性の豐滿な美しさをあらわすという。

第五句は圖録釋にしたがうが、その含意は定かでない。

## ●吳一三

李氏古制社、

剋象天光齊、

五帝三王、

日月白易、

□□□里、

子朝日清明、

子孫正。

（注）

湖北省鄂州市蓮花村戴家山出土の對置式神獸鏡（鄂州・二二八）の外區銘。圖像紋様は吳後半期の紀年銘鏡に近い。半圓方形帶の方格には銘文をいれていない。銘文の釋文は圖録にしたがいつつ、寫眞により一部改めた。

第一・第二句を圖録は句讀せずに「李氏古制祀刻象无光濟」と釋したが、「祀」は「社」、「刻」は「剋」、「无」は「天」、「濟」は「齊」

李氏の古制は社にして、

像を剋み天光齊しからん。

五帝三王あり。

日月は白く易らん、

□□□里、

子、朝日の清明なるがごとく、

子孫、正しからん。

の誤釋であり、ここではそれを五言二句に分けた。「古制」は、昔の制度で、ここでは本鏡が昔の手法に則って制作されていることをいう。「社」は、さいわい、神より授かる幸福。『詩經』大雅・皇矣に「既受帝祉」とあり、鄭箋に「帝、天也。祉、福也。」とある。

第二句の「剋」は、きざむ。「象」は「像」の省字または假借で、鏡の圖像をいう。銘文七四四の「配象萬彊」の「象」と同じ。「天光」は、天に輝くひかり。『漢書』外戚・孝成許皇后傳に「夫日者衆陽之宗、天光之貴、王者之象、人君之位也。」という用例があるが、鏡銘ではほかに例がない。

第三句は銘文七三三などのように「五帝三皇」とあるのがふつうである。華西〇七や吳〇五・〇六に「三王作」とあり、それと關係があるかもしれない。華西〇六の注を参照。

第四句の「易」を圖録は「錫」の假借とする。しかし、ここでは日月の交感によって光が清らかに變化することをいうのであろう。『易經』繫辭上に「生生之謂易」とあり、王弼注に「陰陽轉易、以成化生。」とある。

第五句は型流れのため三字未讀である。

第六・第七句を圖録は「子□日月子孫王」とつづけて讀むが、「子朝日清明、子孫正」であらう。「明」は「照」のようにもみえるが、意味は同じ。「正」は、よい。『儀禮』士喪禮の「決用正」の鄭玄注に「正、猶善也。」とある。

### 三 魏 晉 鏡

魏晉〇一―一二は、福永伸哉（一九九二）によって明らかにされた長方形鈕孔や外周突線などを特徴とし、漢鏡の模倣により、魏の

領域で製作されたと考えられる鏡群である。紀年銘鏡としては青龍三年（二三五）方格規矩四神鏡のほか、甘露や泰始などの年號をもつものが知られている。その銘文は後漢鏡の型式や語句を引き繼ぐものが多いが、「甚大」など特徴的な用字や表現も存在する。三角緣神獸鏡の銘文との共通點が多いのも注目すべきである（林裕己、一九九八）。

魏晉一三―一四は、紀年銘をもつ例はないものの、「晉世寧」のような特徴的な語句から、西晉の作と考えられ、まとまりをもつ鏡群の銘文である（小林行雄・一九八四／近藤喬一・一九九三）。鏡式では對置式神獸鏡と環狀乳神獸鏡とがあり、漢代の鏡を眞似た仿古鏡とみなされる。その銘文も後漢鏡の型式に沿ってはいるが、「晉世寧」のほかにも獨特の用語が使用されている。

#### ●魏晉〇一

羊作同竟甚大工。

羊 銅鏡を作るに、甚に大いに巧みなり。

上有山同不知老。

上に仙人有り、老いを知らず。

服者長生買主壽。

服する者は長生し、買主は壽ならん。

（注）

京都府椿井大塚山古墳出土の方格規矩四神鏡（樋口・八一）にみる。長方形鈕孔・正し字紋・外周突線など魏晉鏡の特徴を備える。銘文のはじまりについて、第三句の「壽」が字劃の最後を渦卷狀に裝飾化していることから、それを銘末として「羊作」から讀むのが通説である。第一句の「工」は東部だが、幽部の「巧」としばしば互換し、幽部の「老」「壽」と押韻することも、その讀みの正しさを裏づける。これにたいして、林裕己（二〇〇八）は「羊」を末尾とし「昌」の假借とみるが、音韻に無理がある。ただし、魏晉鏡の



銘文の多くは本来の銘文から省略や變形されたものが多く、なお検討の餘地がある。

第一句の「羊」は作鏡者名の一部で、「青羊」の「青」や「三羊」の「三」などの脱字かもしれない。あるいは環狀乳神獸鏡の銘文七四五に「蓋作明竟」とあり、本鏡の「羊」は「蓋」の省字か（笠野毅・一九九三b）。また、「羊」は「商」の假借で、五行で「商」は「金」であるから、「商（金）もて銅鏡を作る」と解釋することも可能である。「同竟」・「青同」や「甚大工」・「甚大好」は魏晉鏡と三角縁神獸鏡に頻出する用法である（林裕己・一九九八）。「甚大好」の「甚」はしばしば「はなはだ」と訓讀されるが、『戰國策』秦策の「左右皆曰、甚然。」の高誘注に「甚、謂誠也。」とあることから、「真大好」の「真」と同じ「まことに」の意味である。あるいは「甚」の省字または假借。『爾雅』釋詁に「甚、誠也。」とある。第二句の「山」は「仙」の省字または假借。第四字は「人」の異體字。『集韻』に「人、古作回」とある。「山人」は銘文四五二などに例が多い。

第三句の「買主」はめずらしく、漢鏡銘では「買者」が一般的。類似句に三角縁神獸鏡（京大目録三九）の「服者長生買者受」がある（林裕己・二〇〇八）。

## ●魏晉〇二

青同之竟明且好。

清銅の鏡は明にして且つ好し。

□□長生買者受。

□□は長生にして、買ふ者は壽ならん。

（注）

北京市大營村八號墓出土の方格規矩鏡にみる（北京市文物工作隊・一九八三）。「青同之竟」からはじまる特異な銘文で、長方形鈕孔、

正し字文、外周突線など魏晉の規矩鏡の特徴を備える。銘の途中を缺損しているが、七言二句に復元され、「好」・「受」が幽部で押韻する。

第一句の「青同」は「清（精）銅」または「青銅」。「青銅」は現代の金屬學では銅合金の總稱で、一般的には古代に多い銅錫合金を指すことが多い。辛延年「羽林郎詩」（『玉臺新詠』卷一）に「貽我青銅鏡、結我紅羅裾」とあり、陳直（一九八八・四三・四四頁）はこの詩の制作年代を漢代に比定し、「青銅鏡」のもつとも古い用例とする。しかし、銘文四〇一の「凍冶銅華清而明」や同四〇二の「凍冶銅華得其清」のように、鏡銘では材料の精良さをうたう例が多い。『後漢書』張衡傳に「造候風地動儀、以精銅鑄成。」とあるのも同じ。このため、「青銅」よりも「清（精）銅」と解釋するのが妥當であろう。「青同」も魏晉鏡の銘文に特徴的な用語で、泰始六年（二六〇）鏡（五島・一五）に「青同大□」、泰始七年鏡（五島・七二）に「王氏作青同之竟」、泰始九年鏡（五島・二二）に「張氏作青同竟」など西晉の紀年銘鏡にもみられる。

第二句の冒頭は「保」か。第二字は現在「同」と復元されているが、破損部の補修らしい。「長生買者受」は魏晉〇一と類似するが、「壽」の假借として「受」を用いる。

「青同之竟」ないし「青同」からはじまる銘文の魏晉鏡は、日本にいくつかの出土例がある。たとえば、熊本縣向野田古墳の方格規矩鳥紋鏡（富樫卯三郎・一九七八）には、

青同作竟明大好、長生亘子孫。

とあり、福岡縣城田一號墳の獸帶鏡（福永伸哉・二〇〇五・圖版四二）には、

青同□竟甚大好。買者受。

とある。これらは作鏡者を示さない點が後漢・三國の鏡銘としては異例であり、魏晉で用いられた特定の銘文型式といえるだろう。

### ●魏晉〇三

吾作明鏡甚大工。

刑母雕刻用青同。

保子宜孫。

(注)

吾れ明鏡を作るに、甚に大いに巧みなり。  
型模を彫刻し、清銅を用ふ。  
子を保ち、孫に宜し。

鳥根縣造山一號墳第二石室出土の方格規矩四神鏡にみる〔森貞成・一九三九〕。銘文の釋文は車崎正彦〔二〇〇二・一覽一七一〕にしたがう。〔工〕・〔同〕は東部で押韻する。

第一句の「甚大工」は魏晉鏡と三角緣神獸鏡に特有の表現。

第二句の「刑」は「型」の省字。『荀子』彊國に「刑范正、金錫美、工治巧、火齊得、剖刑而莫邪已。」とあり、唐・楊倞注に「刑與形同、范法也。刑范、鑄劍規模之器也。」という。鑄型のこと。「母」は「模」の假借。『禮記』内則に「沃之以膏曰淳母」とあり、鄭玄注に「母、讀曰、模。模、象也。」とある。また、滋賀縣大岩山古墳出土の三角緣神獸鏡（京大目録一五）に「鏡陳氏作甚大工。刑暮周刻用青同」とあり、「刑母」が「刑暮」に置換している。ほかに鑄型について記した銘文として泰始十年（二七四）神獸鏡（紀年鏡圖說・六朝・四）の「造作吳刑明竟」がある。ただし、現代中國語では鑄型を「范」、鑄型をおこす原型を「模」として區別する。

第三句の「保子宜孫」は魏晉鏡に多い吉祥句。漢鏡銘に多い「長保二親宜孫子」を改變したもののか。

### ●魏晉〇四

吾作大竟真是好。

同出余州。

青且明兮。

(注)

吾れ大いなる鏡を作るに、眞に是れ好し。  
銅は徐州に出づ。  
清にして且つ明なり。

遼寧省遼陽市三道壕一號墓出土の方格規矩鳥紋鏡（東北博物館・一九五五）にみる。正し字文と外周突線をもち、福永伸哉〔一九九七〕によって長方形鈕孔をもつことが確認されている。「好」と「州」が幽部で押韻する。

第一句の「大竟」は鳥取縣馬山四號墳の規矩鏡（山陰考古學研究所・一九七八）の「吾作大竟好且明」や三角緣神獸鏡（京大目録一九）の「新作大鏡」など、魏晉鏡と三角緣神獸鏡に特徴的な語句。「眞是好」は漢鏡銘の「眞大好」を變換したもののだが、めずらしい。

第二句の「同」は「銅」、「余」は「徐」の省字。三角緣神獸鏡の「銅出徐州、師出洛陽」という銘文に關連する語句として注目されている。三角緣〇一の注を參照。

### ●魏晉〇五

吾作明鏡甚獨奇。

保子宜孫富無訾。

(注)

吾れ明鏡を作るに、甚に獨り奇なり。  
子を保ち、孫に宜しく、富訾無し。

河北省易縣燕下都武陽臺東採集の方格規矩鳥紋鏡（河北・五四）にみる。同文が靜岡縣松林山古墳の三角緣神獸鏡（京大目録一〇二）や仿製三角緣神獸鏡（京大目録二三三）にあり、魏晉の規矩鏡と三角緣神獸鏡のつながりを強く示す資料として注目されている（福永伸哉・一九九七）。七字句の銘文は歌部の「奇」と支部の「訾」とが叶

韻する。

第一句の「甚獨奇」は、本鏡と上記の三角縁神獸鏡・仿製三角縁神獸鏡以外に知られていない。漢鏡四期の方格規矩四神鏡にみられる「成獨好」に起源を求める意見もある〔林裕己・二〇〇八〕。

第二句の「訾」は、はかる。『列子』説符に「錢帛無量、財貨無訾」とあり、『國語』齊語の「訾相其質」の韋昭注に「訾、量也。」とある。「富無訾」は、量りがたいほどの富を得る意。鏡銘としてはほかに例をみない表現である。

# ●魏晉〇六

吾作佳竟自有尙。

吾れ佳鏡を作るに、自づから常有り。

工師刻像生文章。

巧みなる師は像を刻み、文章を生ず。

上有古守辟非羊。

上に古獸有り、非祥を辟く。

服之壽考宜侯王。

之れを服せば壽考にして、侯王に宜し。

(注)

嚴窟二中・二七の方格規矩獸文鏡（鹽齋・上二六裏／K・一五五）にみる。逆し字文で外周突線を缺くが、圖像表現は魏晉の規矩鏡と共通し、銘文にも漢鏡とは異質な用語が認められるため、車崎正彦〔二〇〇二〕は魏晉鏡に加えた。整った七字句で、「尙」・「章」・「羊」・「王」が陽部で毎句押韻する。

第一句の「自有尙」はめずらしい。「尙」は「常」の假借（笠野・一九九三a）。「自有紀」と同じく鏡のもつ規範を表現したもの。

第二句をカールグレンが「工師妙像主文章」と讀んだのは誤り。銘文四四五などの「巧工刻之成文章」を變形したもの〔林裕己・二〇〇八〕。「巧師刻」は希有な語句だが、銘文七〇六にある。

第三句の「守」は「獸」の假借〔林已奈夫・一九七八〕で、漢鏡五

期の淮派の鏡や三角縁神獸鏡に多い。「古」は「固」の假借か。『銀雀山一號漢墓竹簡』一・一三六に「然則兵者、古所以外誅亂、內禁邪」とあり、『説文』六下に「固、四塞也。」とあつて、四方を守護する獸を意味するのであろう。しかし、「固獸」の用例はない。「非羊」は「非祥」ないし「不祥」のこと。「非羊」は「吳氏」獸首鏡の銘文七一八など、もともと廣漢派に特徴的な語句。

第四句の「壽考」は、長壽の意。『説文』八上に「考、老也。」とあり、『漢書』元帝紀の「考終厥命」の顔師古注にも「考、老也。言得壽考、終其天命。」とある。

# ●魏晉〇七

吾造之竟大無傷。

吾れ之の鏡を造り、大いに傷無し。

巧工作成文章。

巧みなる工作り、文章を成す。

令君高位宜侯王。

君をして高位なら令め、侯王に宜し。

子孫千人。

子孫は千人ならん。

(注)

古鏡・中二七表の方格規矩鳥紋鏡にみる（K・一〇六）。正し字紋や外周突線など魏晉鏡の特徴をもつが、拓影では鈕孔は圓形のようなである。銘文は「傷」・「章」・「王」が陽部で押韻する。

第一句をカールグレンが「吾造作之竟出陽」と讀んだのは誤り。第二句は「作」につづく「之」字が脱落している。

第四句の「子孫千人」は「池氏」獸帶鏡の銘文五一五のほか、鳥取縣馬山四號墳出土の方格規矩鳥紋鏡（山陰考古學研究所・一九七八）にもみられる。

●魏晉〇八

尙方作竟甚奇矣。

尙方鏡を作るに甚に奇なり。

倉龍在左、

蒼龍は左に在り、

白虎在右。

白虎は右に在り。

朱鳥玄武、

朱鳥と玄武は、

辟去凶名、

凶命を辟去す。

子孫翁翁宜父母。

子孫は滂滂として、父母に宜し。

家中富昌貴且。

家中は富み昌え、貴く且つ。

(注)

狩谷掖齋舊藏の細線式獸帶鏡〔森下章司・二〇〇四〕にみる。出光美術館の所藏鏡に同型ないし同一品がある。起句の前に「・」記號があり、七字句を基調とするが、「奇」は歌部、「右」「母」が之部、「名」は耕部で、韻をふみはずす。

圖紋にかんしては、漢鏡六期の細線式獸帶鏡と異なるところは見受けられないが、銘文の特徴や、後にあげる『小山林堂書畫文房圖錄』の方格規矩鳥紋鏡との共通性から、魏晉鏡の可能性が高い。

第一句の「甚奇」は魏晉〇五や三角緣神獸鏡・仿製三角緣神獸鏡の「甚獨奇」に似る。「甚」は三角緣神獸鏡とその關連鏡群に特徴的な用字〔林裕己・一九九八〕。魏晉〇一の注を參照。助辭の「矣」は、漢鏡七期の「龍氏」鏡や「上方」鏡に例がある。

第五句末の「名」は「命」の假借。『墨子』尙賢中の「乃名三后」に孫詒讓『問詁』は「名・命通。『說文』口部云、名、自命也。畢云、孔書『名』作『命』。」と注する。「凶命」は、悪い運命。『說苑』敬慎に「思此五者、則無凶命、用能治敬、以助天時、凶命不至、而禍不來。」とある。朱雀と玄武は陰陽を調える役割が中心で、悪い運命をしりぞけるといふのはめずらしい。

第六句の「翁」は「滂」の省字。『說文』十一上に「滂、雲氣起

也。」とあり、「滂滂」は雲氣のさかんさま。『荀子』樂論に「箛簫發猛、埙篥翁博」とあり、王先謙『集解』に「俞丰曰、翁、當爲滂。『文選』江賦曰、氣滂渤以霧沓、翁博猶滂渤。」と注する。本銘では子孫が繁榮することであろう。

第七句の「家中」は、漢代では用例が少ないが、賈誼『新書』容經には「妻子家中、得母病乎。」とある。ここでは「尙方」鏡の銘文五二五の「家室」と同じように、家族の意味であろう。末句は本來「家中富昌且清」か。

この鏡銘と共通する銘文をもつものが、『小山林堂書畫文房圖錄』辛冊廿一の線畫による方格規矩鳥紋鏡にみられる。「信濃更科山中」より出土と傍記があり、長野縣川柳將軍塚古墳の出土を想定する説もある〔森本六爾・一九二九〕。その銘文は「尙方（作）竟、左倉龍右……、子孫翁□宜父母、家中富…王」と讀まれ、掖齋舊藏鏡と「子孫翁」・「家中富」など特殊な用語が共通している。銘文は魏晉鏡と位置づけられるものの、両面ともに圖像紋様は漢鏡をかなり忠實に模倣している。

●魏晉〇九

陳是作鏡、

陳氏鏡を作るに、

君宜高官。

君高官に宜し。

保子宜孫。

子を保ち、孫に宜し。

萬年。

萬年ならん。

(注)

大阪府安滿宮山古墳出土の神獸鏡〔高槻市教育委員會・二〇〇〇〕にみる。平緣ではあるが、同向式の配置や神獸像表現などが景初三

年・正始元年の三角縁神獸鏡と共通し、陳氏の一連の作のひとつとみられる。そのなかでも縁部が三角縁化していない段階の製品である。銘文は三角縁神獸鏡の陳氏特有のやや大ぶりの文字で、半圓方形帯の方格に一文字ずついれる。元部の「官」と文部の「孫」と真部の「年」が叶韻する。

第一句の「鏡」の金偏を省略しないのは陳氏の銘文の特徴。

第三句の「保子宜孫」も陳氏が多用する吉祥句。

# ●魏晉一〇

吾作明竟大好。

上有東王父西王母。

師子辟邪居中央、

甚樂兮。

吾れ明鏡を作るに、大いに好し。

上に東王父と西王母有り。

獅子と辟邪は中央に居る。

甚に樂し。

(注)

岡山縣郷觀音山古墳出土(梅原末治・一九三八)および宮内廳三の丸尙藏館藏の神獸鏡(車崎正彦・二〇〇八)にみる。釋文は車崎正彦による。兩者は同型鏡であるが、内區外周など一部に紋様の改變が認められる。長方形鈕孔と傾斜端面という特徴をもち、福永伸哉(一九九四)は三角縁神獸鏡の關連鏡群と位置づけ、車崎は三角縁神獸鏡にふくめる。銘文型式は三角縁神獸鏡と共通し、とくに三角縁環狀乳神獸鏡(京大目録二九・三〇)と類似する部分が多い。幽部の「好」と之部の「母」が叶韻する。

第三句の「師子」は「龍氏」浮彫式獸帶鏡の銘文五四二と「龍氏」畫像鏡の銘文に登場するが、例は少ない。しかし、三世紀になると、魏晉一に「白帟師子居中央」とあるほか、三角縁神獸鏡には京大目録一九の「左龍右帟、師子有名」、「師子辟邪世少有」(三角

緣〇五)、「師子天鹿其奔龍」(三角緣〇七)など頻出し(林裕己・一九九八)、龍虎や辟邪など各種の獸と組合せて用いられている。末句の「甚樂」はめずらしい(車崎正彦・二〇〇八)。「甚」は魏晉の規矩鏡と三角縁神獸鏡に共通する文字遣い。

# ●魏晉一一

尙方作竟大母傷。

巧工刻之成文章。

白帟師子居中央。

壽如金石佳自好。

上有山人不知老兮。

尙方鏡を作るに、大いに傷無し。

巧みな工は之を刻み、文章を成す。

白虎と獅子は中央に居る。

壽は金石の如く、佳にして自づから好し。

上に仙人有り、老いを知らず。

(注)

京都府一本松古墳(梅原末治・一九二〇b)や兵庫縣吉島古墳(梅原末治・一九二五)出土の浮彫式獸帶鏡にみる。小林行雄(一九七九)は三角縁神獸鏡の同範鏡一番とし、三角縁神獸鏡と關連づける意見が強い(車崎・二〇〇二)。銘文の第三句までは「傷」・「章」・「央」が陽部で押韻し、第四句で換韻して「好」・「老」が幽部で押韻する。林裕己(二〇〇八)は第一・第二句が樋口分類のL式、第四句がQ式、第五句がK式というように各種の銘文型式を組合せた「珍しい銘文」であり、第四句の「佳自好」は樋口分類Q式の「佳且好」の變形と考える。また、「白帟」と「師子」の組合せもめずらしい。

日本出土の獸帶鏡にはこれと同様の銘文型式をもつ例がいくつかあり、福永伸哉(一九九四)は三角縁神獸鏡と關連する魏鏡とみなしている。たとえば、大阪府萬年山古墳出土の浮彫式獸帶鏡には、尙方作竟大母傷。□□刻之成文、白帟辟邪居中。壽金如石佳自好。上有山人不知老。



という銘文があり、「白虎辟邪居中」や「佳自好」という特徴的な語句が共通する。

また、長方形鈕孔や紋様表現が三角縁神獸鏡と近似する四獸式の畫像鏡がある〔西田守夫・一九七二〕。たとえば、群馬縣前橋天神山古墳出土鏡の銘文は、

尙方乍竟大無傷。巧工刻之成文章。和以銀錫青且明。長保二見兮。

とあり、三角縁神獸鏡（京大目録六〇）とほぼ同じ銘文をもっている。

# ●魏晉一二

顏氏作自右己。 顏氏作るに、自づから紀有り。

東王父西王母。 東王父・西王母あり。

〔注〕

大阪府藤田山古墳〔北野耕平・一九六七〕と鳥取縣中西尾古墳〔梅原末治・一九二四〕から出土した同範／同型鏡の環狀乳神獸鏡にみる長方形鈕孔をもち、青龍三年「顏氏」方格規矩四神鏡と同じ工房の製品と位置づけられている〔福永伸哉・一九九九〕。「顏氏」は現在のところ本鏡と青龍三年鏡にみられるのみだが、銘文型式は異なっている。〔己〕・〔母〕は之部で押韻する。

第一句の「右」は「有」の假借だが、字形は判然としない。〔己〕は「紀」の省字または假借。「自右紀」の例は三角縁神獸鏡にみられる〔林裕己・二〇〇八〕。

# ●魏晉一三

青蓋作鏡以發陽。 青蓋 鏡を作り、以て陽を發す。

覽觀四方昭中英。 四方を攬觀し、中央を照らす。

左龍右虎辟不詳。 左龍・右虎は不祥を辟く。

鳥朱玄武順陰陽。 朱鳥・玄武は陰陽を順ふ。

服之富貴子孫強。 之れを服せば富貴にして、子孫は彊ならん。

長保二親樂未嘗。 長く二親を保ち、樂しみ未だ嘗てあらず。

風雨時節五穀豐。 風雨時節あり、五穀豊かなり。

四夷歸化天下平。 四夷は歸化し、天下平らかなり。

休兵息吏晉世寧。 兵は休み吏は息ひ、晉の世は寧らかなり。

〔注〕

福井縣泰遠寺山古墳出土鏡にみる。これを調査した小林行雄（一九八四）は關連資料とあわせて銘文の釋讀をおこない、近藤喬一（一九九三）は類例を加えて検討した。銘文中の「晉世寧」から晉鏡に位置づけられる。圖像は環狀乳神獸鏡に屬すが、漢鏡の模倣で、幅の廣い銘帶を外區にめぐらすのが特徴である。銘文は整った七字句をなし、陽部の「陽」・「英」・「詳」・「強」・「嘗」・「豐」と耕部の「平」・「寧」とが叶韻する。陽部と耕部の叶韻例は銘文一〇三・二一九など前漢鏡銘から數多くある。

第一句の「青蓋」は漢鏡五期に「尙方」から分かれた工房で、それ以後も銘文上では長期にわたって存続したことになるが、西晉代のそれが同一の工房であつたのかどうかは疑わしい。「發陽」はこの一群の鏡に獨特の表現。第二句とあわせて鏡が太陽のような光を放つ意味であらう。

第二句もこの一群に獨特の語句。「覽觀」は魏晉一四では「攬觀」と表記される。「覽觀」は眺めることで、「攬觀」なら手に取って眺める意味になる。ただし、『詩經』大雅・皇矣に「皇矣上帝、臨下有赫、監觀四方、求民之莫」とあり、「攬」は「監」の假借で、「監觀四方」は「覽觀四方」と同義となる。いづれにしても鏡に假託し

て晉王朝の威光が四方に照射することをうたったもの。カールグレン(K・一二〇)が古鏡・中一四裏の神獸鏡銘中の「攬觀四方昭中英」について鏡の所持者が四方をみて中央を映しだすと解したのは、そのとき「晉世寧」や「大晉」をふくむ銘文が知られていなかったからである。日月の光が天を照らす語句としては、銘文四四三の「昭于宮室日月光」や三角縁〇二(京大目録三九)の「明如日月昭天梁」がある。なお、第二句の「昭」は司馬昭の諱を犯すとされるが(王仲殊・一九八九)、「昭」は平聲、「照」は去聲で聲調が異なる。

第三・第四句のように四神とその役割をうたった句は、銘文四一など漢鏡四期の方格規矩四神鏡で成立したものであるが、本鏡では圖像と對應しない。

第五句の「強」は「彊」と同一字で、盛んの意。

第六句の「未嘗」は、味わったこと、経験したことがないという意味。銘文五四一の「世間未嘗有」という例からみれば「樂未嘗有」とあるべきだが、韻をあわせ、三字句にする必要があるため、「有」を省略している。この一群の鏡に特有の表現である。

第七句は本来「五穀熟」となるが、韻をあわせるため「熟」を「豐」とした。太康三年(二八二)鏡(紀年鏡圖説・六朝一二)に「時雨應節。五穀豐熟。天下復」という類例があり、年代も近い。

第八句の「四夷歸化天下平」は「四夷服」と「天下復」を合成したものの(小林・一九八四)。「歸化」は後漢以後に用いられた語句で、たとえば『魏志』鄧艾傳に「吳必歸化、可不征而定也」とあり、「四夷歸化」は『舊唐書』職官志三に「典客令掌二王後之版籍及四夷歸化在蕃者之名數」という用例がある。漢鏡では銘文四五四などに「……四夷服。多賀新家人民息。胡虜殄滅天下復」とある。

第九句の「休兵息吏」は「人民息」にならった表現(小林・一九八

四)。王仲殊(一九八九)の指摘するように太康元年(二八〇)の晉による吳平定をいい、江蘇省江寧縣出土甌(南京市博物館・一九八七)には「太歲庚子、晉平吳、天下太平」とある。王仲殊はまた「晉世寧」を太康年間に流行した「杯盤舞」の際の歌謠とし、本鏡の年代を太康年間に位置づける。すなわち、『搜神記』卷七には「晉太康中、天下爲晉世寧舞、矜手以接杯槃而反覆之」とあり、『樂府詩集』卷五十六の「晉杯槃舞歌」は「晉世寧、四海平、晉天安樂永大寧」とある。矢田博士(一九九五)は、西晉期の應詔・應令詩には王朝贊美の句が前後の時期に比べてとくに多いという。本鏡の第八・第九句はそうした時代風潮を反映したもので、第一・第二句も王朝の放つ威光をたたえた文辭であろう。

内區外周には半圓方形帯がめぐり、方格に一字ずつ銘文をいれている。

宜・天・王・公・侯・伯・子・男

これと同じ方格銘が紹興・五一の環狀乳神獸鏡にもある。「公侯伯子男」は『周禮』王制に「王者之制祿爵、公侯伯子男、凡五等」とある周制の五等爵。咸熙元年(二六四)に司馬昭は禮儀・法律・議官制を整備し、はじめて五等爵を建てた(『晉書』文帝紀)。司馬昭の子の司馬炎(武帝)は泰始元年(二六五)に晉を建て、皇族二七人を王に封じた。これにより司馬氏は、國家的身分制としての貴族制を敷き、五等爵にも民爵にもふくまれない天子・王である司馬氏が唯一無二の公權力であることを示したのである(渡邊・二〇〇七)。これを敷衍すれば、銘文の「天」は「天子」である皇帝、「王」は泰始元年に封じられた王をいうのではなからうか。本銘は「宜侯王」のような實態のない吉祥句とちがって、司馬氏の理念に沿って制定された身分秩序をたたえ、「晉世寧」と同様に王朝の安寧を祝頌する

文言と考えるのである。ただし、「天王」は鏡銘に「天王日月」として頻出し、天帝と考證されている（林巳奈夫・一九八七）。このため、これを「宜侯王」のような吉祥句とみなし、「公侯伯子男、宜天王（公・侯・伯・子・男は、天王に宜し）」と讀むのも一案である。「天王」が皇帝にかわる身分稱謂になるのは五胡十六國代のこと、それが晉の建國時までさかのぼるのか、なお検討が必要であろう。

# ●魏晉一四

大晉青蓋以發陽。

攬觀四方照中英。

左龍右虎師子翔。

朱鳥玄武順陰陽。

壽如金石樂未嘗。

長保二親子孫昌矣。

（注）

個人藏の對置式神獸鏡（小林行雄・一九八四）にみる。魏晉一三と同じく外區にめぐらされた、斷面かまぼこ形の銘帶にいたしたもの。「陽」・「英」・「翔」・「陽」・「昌」は陽部で押韻する。

第一句は「大晉」をいれたために「作竟」の二字が省かれたが、魏晉一三よりも王朝賛歌の度合いを増している。「青蓋」は魏晉一三を参照。

第三・第四句は四神にあわせて獅子を加える。下三字を小林行雄（一九八四）は「辟子翔」と讀んだが、字形は「師子」である。「翔」は「祥」の假借。『易經』豊に「天際翔也。」とあり、『釋文』に「鄭玄・王肅作祥。」とある。銘文五一二に「朱鳥玄武仙人羊」とあるのも同じ。また、陸心源『千甌亭古磚圖釋』卷二の赤鳥七年（二

大晉の青蓋以て陽を發す。

四方を攬觀し、中央を照らす。

左龍・右虎・獅子は祥なり。

朱鳥・玄武は陰陽を順ふ。

壽は金石の如く、樂しみ未だ嘗てあらず。

長く二親を保ち、子孫は昌んならん。

四四）輒に「吉翔位至公卿」銘がある。「師子翔」はこの鏡群特有の表現で、「師」は司馬師の諱を避けていないが、咸寧三年に置かれた司馬氏の「宗師」地位名でも「師」を用いている（福原・一九九五・三二九頁）。

第六句の「子孫昌」は湖北省鄂州市澤林嘴出土の永安六年（二六三）對置式神獸鏡（鄂州・二〇五）などにある。

方格には次のような銘を一字ずつ入れる。

三・王・□・聖・竟・服・者・侯・其・師・壽

古鏡・中一四裏の環狀乳神獸鏡（K・一二〇）も銘文の冒頭を「青蓋明竟」とし、「朱鳥玄武」と「左龍右虎」をいれかえ、「順陰陽」を省略するが、ほぼ同文である（圖6）。

青蓋明竟以發陽。 青蓋明鏡、以て發陽す。

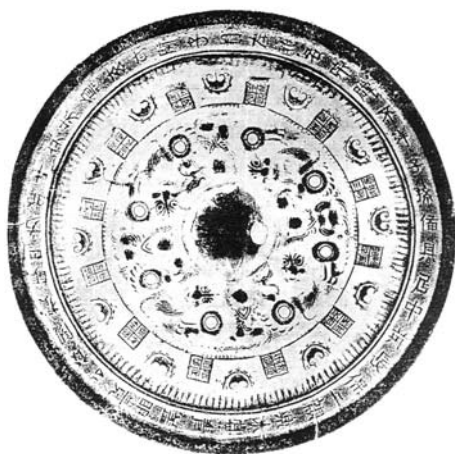


圖6 魏晉14附（古鏡・中14裏）

攬觀四方昭中英。 四方を攬視し、中央を照す。  
 朱鳥玄武師子翔。 朱鳥・玄武・獅子は祥なり。  
 左龍右虜辟不祥。 左に龍、右に虎ありて、不祥を辟く。  
 子孫備具居中英。 子孫備具し、中央に居る。  
 長保二親樂未嘗。 長く二親を保ち、樂しみ未だ嘗てあらず。  
 半圓方形帶の方格には林分類Sbに類似するつぎの四字句をいれる。  
 三□和□、四時應節、天王日月、子孫富貴、百牙作□、衆華主  
 陽。世得光明。其師命長。服者大吉、宜侯公王。命□長□、主  
 陽衆華。

#### 四 三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡の銘文には「天王日月」・「長宜子孫」・「君宜高官」  
 など方格に納められた短銘のものと、長銘のものがある。ここでは  
 は長文の銘から代表的なものをとりあげ、注釋を加える。  
 銘文が記された三角縁神獸鏡の種類を示すには、京都大學文學部  
 考古學研究室の作成した三角縁神獸鏡目録（京大目録）を用い、あ  
 わせて出土古墳や所藏者をひとつ示した。  
 釋文はおもに車崎正彦（二〇〇二）を參照した。また、銘文型式  
 にかんして林裕己（二〇〇六）の分類を併記した。

#### ●三角縁○一

新作明鏡、 新たに明鏡を作るに、  
 幽律三剛。 三剛を幽律せり。  
 銅出徐州、 銅は徐州に出で、  
 師出洛陽。 師は洛陽に出づ。

彫文刻鏤、 文を彫り刻鏤するに、  
 皆作文章。 皆な文章を作す。  
 配德君子、 德を君子に配し、  
 清而且明。 清にして且つ明なり。  
 左龍右虜、 左龍・右虎あり、  
 轉世有名。 世に傳はり、名有り。  
 師子辟邪集會并。 獅子・辟邪は集會して並ぶ。  
 王父王母游戲聞。 王父・王母は游戲して聞す。  
 □□□、 □□□、  
 宜子孫。 子孫に宜し。

#### （注）

大阪府國分茶臼山古墳の三角縁新作徐州銘四神四獸鏡（京大目録  
 一八／K・一九八）にみる。林分類U。起句の前に珠點があり、陽部  
 の「剛」・「陽」・「章」・「明」と耕部の「名」・「并」が隔句で叶韻し、  
 第一二句で換韻して「聞」・「孫」が文部で押韻する。銘文の後半が  
 七字句と三字句になっているものの、三角縁神獸鏡のなかで、この  
 ように整った四言句で長文の銘を構成するものはほかにない。

第一句の「新作」はかつて王莽鏡論争のもとになった（高橋健自・  
 一九一九／梅原末治・一九一九）。京大目録一九の鏡では「新作大竟」  
 とする。「幽凍三剛」は銘文七三九にみられるが、「幽律」は本鏡群  
 獨特の表現。「律」は『集韻』に「律、一曰、法也。」とあり、規則  
 どおり整える意。

第三・第四句の「銅出徐州、師出洛陽」は、富岡謙藏（一九二〇）  
 以來、三角縁神獸鏡の製作地論争とも關連して着目されてきた。ま  
 ず「徐州」について富岡は現在の徐州市にあたる狭い地域を考え、  
 「兩漢時代を通じて彭城國なりしが、魏代初めて徐州を置き、劉宋



の永初三年に再び彭城郡となりし(三〇七頁)とした。これにたいして王仲殊(一九八二)は、いまの徐州市一帯から銅が産出したとの記録はなく、銘文の「徐州」は江蘇省の長江以北から山東省南部までの廣大な地を指すと考える。福山敏男(一九八一・一九八二)も『尚書』禹貢にあげられた九州のひとつ「廣義の徐州」と『史記』田敬仲完世家に「與魏襄王會徐州、諸侯相王也。」という「狭義の徐州」の二種類があることを示し、「銅出徐州」は「古典中の古典」ともいえる『尚書』の禹貢から出たもので、語感に莊重さがあり、銘文の格調を高めるのに役立っている」と評する。實際に漢武帝が全土を十三州に分けてより行政区畫としての「徐州」が存在し、『續漢書』郡國志三によれば、順帝永和五年(二四〇)には「東海・琅邪・彭城・廣陵・下邳」の五郡國を領域とした。とくに、中平五年(一八八)に監察官の刺史を改めて行政官の州牧を置いてからは、州の役割は増大し、陶謙や劉備らが相ついで「徐州牧」となったことは周知のとおりである。三國代に魏の領域となった「徐州」は、對吳戰爭において重要な位置を占め、『資治通鑑』魏紀九の甘露元年八月條の「以圖青徐」に胡三省は「徐州統下邳・彭城・東海・琅邪・東莞・東安・廣陵・臨淮」と注している(王蕊・二〇〇八・二七～五二頁)。徐州の銅は丹陽ほど有名ではないが、遼寧省三道壕一號墓出土の規矩鏡に「同出余州」という銘文(魏晉〇四)があり、虚辭とはみなしがたい。つぎの「洛陽」について富岡は「洛陽古くは雒陽に作り兩者併用をせるが、前漢末以來雒陽のみを用ひたること當代の金石文其他の文獻に見る所にして、其の再び洛陽と書するに至れるは三國の魏代なり(三〇八頁)」とし、この鏡を魏以後のものとして考證した。五行相剋説にもとづいて漢代に「洛陽」を「雒陽」に改めたことは銘文六一四の注に記したとおりであり、魏が「洛陽」

に戻したことについては『魏志』文帝紀の裴松之注に引く『魏略』に「詔以漢火行也、火忌水、故『洛』去『水』而加『佳』。魏於行次爲土、土、水之牡也。水得土而乃流、土得水而柔、故除『佳』加『水』、變『雒』爲『洛』。」とある。王仲殊は「師出洛陽」も虚辭とするが、北朝鮮ピョンヤン出土の方格規矩四神鏡に「名師作之出雒陽」という銘文があり(銘文四四六の注)、虚辭と簡単に斷じることはいできない。富岡はまた「師」について「鏡匠を指せる師なる文字が晉代は其の祖司馬師の諱なるより」、本鏡の制作が魏代であると考證した。

第五句の「鏤」は、糸のように細いもの、刻まれた紋様の細緻なことをいう。『史記』禮書に「刻鏤文章、所以養目也。」とある。

第七句の「配德君子」は、この鏡群に特有の語であるが、意味不詳。銘文七四〇の「配像世京。統德序道」を變形した語句で、銘文のつながりからみるなら、「君子」は神像を示すものか。

第八句の「而」は四言句に整えるための助辭。銘文五二八に「佳而且好」とあるのも同じ。

第一〇句はほかに例がない。同型式の銘文である京大目録二〇・三七では「傳世有(右)名」とあり、「轉」は「傳」の假借。『呂氏春秋』必己に「若夫萬物之情、人倫之傳則不然」とあり、高誘注は「傳猶轉」という。カールグレンは「あなたがこの鏡を世の中に傳えて名聲をえられますように」と譯すが、四言句の構造からみて主語は前の「左龍右虎」であろう。京大目録一九では「左龍右虎、師子有名」となる。

第一一・第一二句もめづらしいが、銘文五四二に「師子天祿會是中」とあるのは近い表現。第二二句をカールグレンは「師子辟邪集會、并王父王母游戲、聞□□□」と句讀し、「獅子と辟邪が王父と



王母とともに遊び戯れる」と解した。しかし、押韻からみれば、上記のように句讀するのが妥當であろう。『漢書』廣川惠王越傳の「無令出敖」の顏師古注に「敖、謂游戲也。」とあり、銘文四五〇などに仙人が「浮游天下敖三海」とあるのと同じく、仙人が「游戲」することを示す。「并」は『說文』八上に「并、相从也。」とあり、「竝」と同じ。類似的表現に銘文五二八の「奇守竝有」や銘文五二九の「奇守竝來出兮」がある。

第一三句は字が潰れており、三字分ほどが不明。

これに類似する銘文が數種類（京大目録一九・二〇／K・一九九・二〇〇）あり、いずれも「新作」ではじまる。また、京大目録三七は「吾作」ではじまり、内區圖像などにちがいがあがあるが、同型式の銘文をもつ。

# ●三角縁〇二

亲出竟右文章。  
明如日月昭天梁。  
長保子宜孫富如天、  
位至三公爲侯王。  
左龍右席辟非羊。  
朱鳥玄武自彭。  
元得老受王父母、  
服者長生。  
買者受金石、  
竟市。

新たに出づる鏡、文章有り。  
明なること日月の如く、天梁を照らす。  
長く子を保ち孫に宜しく、富は天の如し。  
位は三公に至り、侯王と爲らん。  
左龍・右虎は非祥を辟く。  
朱鳥・玄武は自れ方なり。  
元に老壽を得ること王父母のごとし。  
服する者は長生せん。  
買ふ者の壽は金石のごとし。  
鏡師。



圖7 三角縁02 滋賀縣雪野山古墳出土  
〔雪野山古墳發掘調査團1996報告篇、圖67〕

（注）

滋賀縣雪野山古墳五號鏡（圖7）など三角縁亲出四神四獸鏡（京大目録三九）にみる。フリーア美術館藏鏡をもとにしたカールグレン（K・二五六）の釋讀では、第四句第五字の「爲」、第六句第五字の「自」、第七句第二字の「得」、第一〇句第二字の「市」が未讀である。釋文は雪野山古墳發掘調査團（一九九六）にしたがう。起句の前に三點記號があり、第七句まではおおむね七字句の體裁で、陽部の「章」・「梁」・「王」・「羊」・「彭」と耕部の「生」とが叶韻する。第一句の「亲」は「新」の省字で、「右」は「有」の假借。「有文章」は三角縁神獸鏡に多用され、三角縁〇八に「身有文章口銜巨」とあるように獸像の姿をあらわすのに用いるが、ここでは鏡の紋様を示す。あるいは『論語』泰伯に「煥乎其有文章」とあり、その

『集注』に「文章、禮樂法度也。」とあるのにしたがえば、規範をあらわす「自有紀」と共通する表現とも考えられる。

第二句はめずらしい。「昭」は「照」の省字。「天梁」についてカールグレンは『晉書』天文志上の「北方、南斗六星、天廟也。……南二星、魁、天梁也。」によって北半球の星座の中の二星を指すこともあるが、班固『西都賦』（『文選』卷二）の「以與天梁」の李善注に「天梁亦宮名也。」とあるのを参照して、本銘での意味は「天梁宮」であり、K・一〇四の「昭于宮室」と関連づけた。しかし、『吳越春秋』勾踐伐吳外傳に「玄武天空威行、孰敢止者、度天關、涉天梁」とあるように、そのまま天の梁を意味し、その高みに達するほど光り輝くこととみるべきであろう。

第三句の「富如天」もめずらしい。銘文四三三に「富如江河入四海」という語句があった。

第四句の第五字を報告は「刃」のように作字するが、「爲」の草體であろう。

第五句の「非羊」はめずらしく、「不羊」が通例。銘文七一八・七二三の獸首鏡に例がある。

第六句の第五字はこれまで未讀である。「自」の下にアラビア数字の「4」が付属するような字形で、「自」の草體ではなからうか。本来は「自四彭」とあるべきところを「四」字が脱落したもののか。ただし、「朱鳥玄武」に後續する語句は「順陰陽」となるのがふつうである（銘文四三八ほか）。

第七句・第九句の「受」は「壽」の假借。華西〇九に「其師受」、魏晉〇二に「買者受」という例がある。第七・九句はいずれも長壽を願う文言の繰り返しである。

第一〇句の「市」は「師」の假借で、「竟市」は「鏡師」であら

う。これもめずらしい表記。

### ●三角縁〇三

王氏作竟甚大明。 王氏 鏡を作るに、甚に大いに明らかなり。  
同出徐州刻鏤成。 銅は徐州に出で、刻鏤して成る。

師子辟邪嬈其嬰。 獅子・辟邪は其の纓に嬈る。  
仙人執節坐中庭。 仙人は節を執りて、中庭に坐す。

取者大吉樂未央。 取る者は大吉にして、楽しみ未だ央ぎず。

（注）

奈良縣黑塚古墳二〇號鏡など三角縁王氏作徐州銘四神四獸鏡（京大目録七九／K・二四一）にみる。内區を乳で區分せず、神獸像を對置式ふう配する。獸は鈕から伸びる「巨」を銜み、下部に房飾りのついた傘松形紋様が神像の脇にある。整った七字句で、陽部の「明」・「央」と耕部の「成」・「嬰」・「庭」が叶韻する。ただし、森博達（二〇〇三）は「後漢になると、「明」が「成・嬰・庭」と同じ『耕部』に移るが、「央」は三國時代でも『陽部』のままである。『陽部』と『耕部』の合韻例は、三國時代にはない」とするが、後漢代の銘文五〇九・六〇一などは「明」をふくむ陽部だけの押韻例であり、陽部と耕部の叶韻例も同時代の華西〇二・吳〇八・魏晉一三など枚舉にいとまがない。

第一句の「王氏」は、三角縁神獸鏡の製作者名としては本例と山口縣宮ノ洲古墳出土盤龍鏡（京大目録〇六）のみ。「甚大明」はほかに例をみない。

第二句は三角縁〇一などの「銅出徐州、師出洛陽。彫文刻鏤、皆作文章」を切り縮めたもの。

第三句の「師子・辟邪」という組合せは、ほかに京大目録二一・

二九や魏晉一〇にみられる。「燒」は、たわむれる。カールグレンは『説文』十二下の「燒、苛也。一日擾也。戲弄也。」や『淮南子』本經訓に登場する惡鬼の「九嬰」を参照して「不祥のものたちを苦しめ弄ぶ」と解した。しかし、三角縁〇一に「師子辟邪集會并。王父王母游戲聞」とあるように、「燒」はむながいの「嬰（纓）」を戯れ弄ぶさまを描寫したもの。西田守夫（一九九三）はむながいが「巨」につながるものと説明した。本例からみると、林巳奈夫（一九七八）が「奇守」に読みかえられるとした「戲守」（京大目録五八・六一・六二・八二）は、字義どおりに「戯れる獸」と解釋するのが妥當であろう。

第四句の「節」は本来、天子が使者・將軍・王などに任命の證しとして與えたもの。『後漢書』光武帝紀の李賢注に『漢官儀』を引いて「節、所以爲信也。以竹爲之、柄長八尺。以旄牛尾爲其旒三重。」とあり、漢代の壁畫や畫像石にその圖像が散見される（林巳奈夫・一九七八）。本銘では仙人の持ち物として記されているが、鏡の圖像では神像の横にあらわされた傘松形紋様がそれにあたる。三角縁神獸鏡に多數みられる傘松形紋様を「節」とみなし、この鏡に特別な役割を想定する説もある（新納泉・一九八九）。また、西田守夫（一九九三）は、神降しによって降臨した神仙たちの装いが「其一人執紫旄之節」と『眞誥』に記されることから、「節」は牛の尾の毛飾りがついた「旄節」であり、「茅」が「旄」の借字であること、星宿の「昂」を音通から「茅」と書く例から、節頭は「昂」であり、天の「維綱」がそこで繋がれたものと解釋した。「中庭」をカールグレンは「其庭」と誤釋。『尚書大傳』洪範五行傳に「於中庭、祀四方」とあり、鄭玄注に「中庭、明堂之庭也。或曰、朝廷之庭也。」とある。

### ●三角縁〇四

吾作明鏡、  
練取好同。  
文章皆成、  
甚師甚工。

上有東王父西王母。  
宜子保孫甚大好。

汜由天下至四海。  
曷食玉泉飢食糗。

千秋萬歲不老兮。

吾れ明鏡を作るに、  
好き銅を練取せり。

文章は皆な成り、  
甚<sup>ま</sup>の師は甚に巧みなり。

上に東王父・西王母有り。  
子に宜し、孫を保ち、甚に大いに好し。

天下を浮遊し、四海に至る。  
渴しては玉泉を飲み、飢ゑては糗を食らふ。

千秋萬歲も老いず。

（注）

岡山縣備前車塚古墳などの三角縁吾作二神六獸鏡（京大目録三二）にみる。内區には各種の獸紋の上に騎乗した神仙像をあらわす。銘文の第四句までは四字句、第五句以降はおおむね七字句で構成される。「同」・「工」が東部で押韻し、第五句で換韻して之部の「母」・「海」と幽部の「好」・「棗」・「老」が叶韻する。

第二句の「練取好同」はほかに例が少ない。「同」は「銅」の省字または假借。

第四句の「甚師甚工」もめずらしい。「甚」は「はなはだ」ではなく「まこと」と讀むべきことは、この例からも明らかである。

第六句は錯簡で、第五句と第七句が本来つながるべきもの。また、「宜子保孫」と「甚大好」も本来とは別の句が連続したものである。

第七・第八句は漢鏡四期に登場した語句だが、「浮游天下敖三海」と表記するのが通例。第八句の「曷食」は「渴飲」の省割。

大阪府安満宮山古墳（高槻市教育委員會・二〇〇〇）の三角縁吾作四神四獸鏡（京大目録二九一三〇）も同様の銘をもつ。報告書の釋讀

を改正した車崎正彦〔二〇〇二〕の釋文を示す。

吾作明鏡、

吾れ明鏡を作るに、

凍取好同。

好き銅を鍊取せり。

文章皆□、

文章は皆な□、

師□工。

師は□巧みなり。

上有東王父王西母、

上に東王父・西王母有り。

師子辟邪甚□□、

師子・辟邪は甚に□□。

□□□□、

□□□□、

□□老不、

□□老いず。

吏人得之、

吏人之れを得れば、

位至三公。

位は三公に至らん。

甚樂兮。

甚に樂しまん。

銹のため文字の讀み取れない部分が多いが、第六句以降を別の句に換えている。第七句の第二字を報告では「巨」とするが、車崎は不明字とする。第八句の「老不」は「孫子」かもしれない。

### ●三角縁〇五

張氏作鏡眞巧。

張氏鏡を作るに、眞に巧みなり。

仙人王喬赤松子。

仙人の王喬・赤松子あり。

師子辟邪世少有。

獅子・辟邪は世に有ること少なし。

渴飲玉泉飢食棗。

渴しては玉泉を飲み、飢ゑては棗を食らふ。

生如金石天相保兮。

生は金石の如くして、天と相ひ保たん。

(注)

奈良縣黑塚古墳一六號鏡などの三角縁張氏作三神五獸鏡（京大目録二二）にみる。林分類 R b1。七字句を基本とし、幽部の「巧」・「棗」・「保」と之部の「子」・「有」が叶韻する。

第一句の「鏡」には金偏がある。「眞巧」は「眞大巧」から一字脱落する。

第二句の「王喬赤松子」は仙人の王子喬と赤松子。鏡銘にもしばしば用いられる。漢鏡四期の銘文四三三にみられるのはその早い例。

『淮南子』齊俗訓に「今夫王喬赤誦子、吹嘯呼吸、吐故內新、遺形去智、抱素反眞、以游玄眇、上通雲天」とあり、『論衡』無形には「稱赤松王喬、好道爲仙、度世不死、是又虛也」とある（櫻井達彦・一九八四・一九八五／大形徹・一九九二）。「世少有」は銘文五二二など淮派の鏡に多い。

第四句も漢鏡四期の銘文四五〇・四五一から取りいれた表現。「玉泉」・「棗」は銘文四五〇の注を參照。

第五句の「天相保」は、銘文五三七に「與天相保順陰陽」や銘文七二五に「與天相保無窮止」などの例がある。

奈良縣黑塚古墳二一號鏡などの三角縁張氏作四神四獸鏡（京大目録三四）は「張氏作」ではほぼ同型式の銘文であるが、第三句を「神玄辟邪世少有」とする。「神玄」は孤例だが、車崎正彦〔二〇〇二〕は「玄」を「畜」の省劃とし、音義が「獸」に通じることから、「神獸」の意味に解釋した。しかし、「玄」を「畜」の省劃とみることは、「玄」が「畜」の音符ではないため、むずかしい。むしろ「玄」は「龍」の假借で、「神龍」は神獸の一種であろう。すなわち、敦煌佛爺廟灣一號墓の畫像磚に描かれた虎形の獸に「龍龍」という榜題があり（殷光明・二〇〇六）、『漢書』五行志の「癸化爲玄龍」の注に「韋昭曰、玄、黑。龍、蜃蜴也。似蛇而有足。」とあるように、「龍」は蜃蜴や龍のような獸を指すことがあった。また『國語』周語下には「昔武王伐殷、歲在鶉火、月在天駟、日在析木之津、辰在斗柄、星在天龍」とあり、星宿のひとつに「天龍」があった。あ

るいは「神龍」は「天龍」の別名であつたのかもしれない。

### ●三角縁〇六

吾作明鏡甚大好。

上有東王父西王母。

仙人王喬赤松子。

渴飲玉泉飢食棗。

千秋萬歲不老。

汩由天下由四海兮。

(注)

『懽堂日曆』記載の狩谷掖齋藏鏡にみる〔森下章司・二〇〇四〕。

『懽堂日曆』では銘文のみの記載であるが、水野忠史『千とせのためし』所収の三角縁神獸鏡の圖がこの鏡にあたる可能性が高い〔徳田・二〇〇七〕。また、この鏡とはほぼ同一だが、銘の開始位置が異なる鏡として奈良縣佐味田寶塚古墳の三角縁吾作六神四獸鏡（京大目録二九）がある。これらの資料を勘案して釋讀した。七字句を基本とする銘文は、起句の前に珠點記號があり、幽部の「好」「棗」「老」と之部の「母」「子」「海」が叶韻する。

第一句の「甚大好」は三角縁神獸鏡とその關連鏡群に特徴的な表現〔林裕己・一九九八〕。

第二・第三句では「東王父・西王母」と「王喬・赤松子」が併記される。いっぽうで三角縁〇五にみられるような獸名を缺く。

### ●三角縁〇七

吾作明鏡甚大工。

上有王喬以赤松。

吾れ明鏡を作るに、甚に大いに好し。

上に東王父・西王母有り。

仙人の王喬・赤松子あり。

渴しては玉泉を飲み、飢えては棗を食らふ。

千秋萬歲も老いず。

天下に浮游し、四海に遊ぶ。

師子天鹿其壽龍。

獅子・天祿・麒麟・龍あり。

天下名好世無雙。

天下の名巧にして、世に雙ぶ無し。

照吾此竟壽如大山。

吾れを此の鏡に照らせば、壽は泰山の如し。

(注)

奈良縣黑塚古墳二三號鏡などの三角縁吾作三神五獸鏡（京大目録二三）にみる。七字句で構成される銘文は、起句の前に菱形の四點記號があり、「工」「松」「龍」「雙」が東部で押韻する。林分類 R b2。

第二句の「以」は「與」の古語。『儀禮』郷射禮の「各以其耦進」の鄭玄注に「今文、以爲與。」とある。

第三句は「獅子・天祿・麒麟・龍」を省割ないし省字で列舉したもの〔西田守夫・一九七六〕。「天鹿」は「天祿」の假借〔林已奈夫・一九七八〕。『漢書』西域傳に「桃拔一名符拔、似鹿、長尾、一角者或爲天鹿」とあるが、本鏡の圖像に一角獸はない。「天鹿」はほかに京大目録三五・三六の三角縁神獸鏡にみえる。「其壽」は狩谷掖齋らが正しく讀んだように「麒麟」の鹿偏を省いた字〔森下章司・二〇〇四〕。「麒麟」は『說文』十上に「麒、麒麟、仁獸也。麋身、牛尾、一角」とある靈獸。『禮記』禮運に「何謂四靈、麟・鳳・龜・龍謂之」とあり、四神のひとつに數えられたこともある。鏡銘としては、ほかに京大目録三五・三六があるのみ。

第四句は鏡工の唯一無二のすぐれた技術をうたつたものであり、「名好」は「名巧」の意だが「天下名巧」はめずらしい。「名巧」は『魏志』方伎傳に「馬先生天下之名巧也。」とあり、「名工」は銘文五二八・五二九・七四六などに例がある。「世無雙」は三角縁〇五の「世少有」をいいかえたものだが、鏡銘ではほかに例がない。『魏志』方伎傳の注に「晏曰、君論陰陽、此世無雙」とある。



第五句の「照吾此竟」は類例がない。銘文四一四の「昭此明鏡誠快意」、銘文四二二の「昭是明鏡人快意」のように、みずからを鏡に照らすことにより泰山のごとき堅固な壽命を祈念する語句であろう。あるいは「吾」を「明」の意味をもつ「晤」の省割とし、「照明此竟壽如太山」と復元することも可能。

●三角縁〇八

吾作明竟甚大好。

上有神守及龍虎。

身有文章口銜巨。

古有聖人、

東王父西王母。

渴飲玉飢淫食棗。

壽如金石長相保。

(注)

吾れ明鏡を作るに、甚に大いに好し。

上に神獸及び龍虎有り。

身に文章有り、口に巨を銜む。

古へに聖人有り、

東王父・西王母なり。

渴しては玉泉を飲み、飢えては棗を食らふ。

壽は金石の如く、長く相ひ保たん。

奈良縣黑塚古墳一九號鏡などの三角縁吾作四神四獸鏡（京大目録六七）にみる。林分類Rc。おおむね七字句で、幽部の「好」・「棗」・「保」と之部の「母」が叶韻し、魚部の「席」・「巨」がこれと合韻する。幽部・之部と魚部との合韻例は淮派の銘文五二四・六〇五などに例があり、淮派の鏡と三角縁神獸鏡との近い關係を示唆している。

第二句の「守」は「獸」の假借で（林已奈夫・一九七八）、「神守」は「神獸」。「神獸」は『魏書』序紀に「有神獸、其形似馬、其聲類牛、先行導引、歷年乃出。始居匈奴之故地」、『晉書』呂光載記に「龍者神獸、人君利見之象」、「抱朴子」内篇・校釋の「又有神獸、名獅子辟邪、三鹿焦羊、銅頭鐵額、長牙鑿齒之屬、三十六種、盡知

其名、則天下惡鬼惡獸、不敢犯人也。」などがあるが、三國代にさかのぼる用例はない。「及」を等位接續詞として用いる鏡銘は、ほかに例がない。

第三句の「身有文章」は靈獸の姿が精妙にあらわされていることを示し、とくに「巨」を銜えていることを描く。神獸の銜える「巨」については、武器説（後藤守一・一九二〇／梅原末治・一九四四）や編鐘の臺座である鐘鐻（虞）説（駒井和愛・一九四三）が提示されていたが、西田守夫（一九九三）は畫紋帶神獸鏡にみえる「天禽四守、銜持維綱」という銘文を手がかりに「巨（鉅）」は日月星辰をつなぐ「維綱」という説を提起した。

第四句の「聖人」は、儒家のあいだでは堯・舜・周公・孔子などをいうが、『莊子』雜篇・外物では、神人―聖人―賢人―君子―小人という序列である。銘文四〇三に「聖人之作鏡兮」とあり、その注を參照。しかし、漢鏡七期になると、徐州系の銘文七一三に「聖人周公魯孔子」とあるほか、銘文七二八には「賢聖神仙坐東西」とあり、その圖像分析とあわせ考え、東王公・西王母を「賢聖なる神仙」と呼んだものと解釋した。また、三段式神獸鏡の華西〇二には「調刻神聖。西母東王」とあり、圖像分析により「神聖なる西（王母・東王（父）」と解釋した。本銘も同じように「聖人たる東王父・西王母あり」と解釋しておく。なお、三角縁一一に「上有神人王父母」とあり、東王父・西王母は「神人」とされることもあった。

第六句では「飢」と「淫」の順番が錯誤している。「玉淫」は「玉泉」の假借。

●三角縁〇九

吾作明竟甚大好。

吾れ明鏡を作るに、甚に大いに好し。

上有神守及龍席。  
身有文章口銜巨。

上に神獸及び龍虎有り。  
身に文章有り、口に巨を銜む。

古有聖人、

古へに聖人有り、

東王父西王母。

東王父・西王母なり。

渴飲玉淦。

渴しては玉泉を飲む。

五男二女長相保。

五男二女あり、長く相ひ保たん。

吉昌兮。

吉昌ならん。

(注)

奈良縣新山古墳一一號鏡などの三角縁吾作四神四獸鏡(京大目録三二)にみる。内區の神像に「東王父」・「西王母」の榜題がある。銘文は起句の前に三點記號があり、おもに七字句と四字句で構成される。幽部の「好」・「保」と之部の「母」が叶韻し、魚部の「席」・「巨」がこれに合韻する。林分類Rc。

第一く第五句は三角縁〇八と同じ。

第七句の「五男二女」は「五男二女の子どもにめぐまれる」意。「周是作」斜縁神獸鏡の銘文七一五に同銘があるほか、銘文五二六に「五男三女」、銘文五三一に「十男五女」という例がある。銘文五二六の注を參照。「〇男〇女」は三角縁神獸鏡では本例のみ。

末句の「吉昌」は『論衡』詰術に「嚮得其宜、富貴吉昌」、『晉書』天文志中に「人君吉昌、百姓安寧」という例がある。末字は「兮」の記號化したものか。

### ●三角縁一〇

陳是作竟甚大好。  
上有神守及龍席。  
身文章口銜巨。

陳氏鏡を作るに、<sup>まじ</sup>甚に大いに好し。  
上に神獸及び龍虎有り。  
身に文章あり、口に巨を銜む。

古有聖人、  
東王父西王母。

古へに聖人有り、  
東王父・西王母なり。

渴飲玉淦飢食棗。

渴しては玉泉を飲み、飢ゑては棗を食らふ。

長相保。

長く相ひ保たん。

(注)

兵庫縣西求女塚古墳五號鏡など三角縁陳是作五神四獸鏡(京大目録五九)にみる。林分類Rc。七字句を基本とし、幽部の「好」・「棗」・「保」と之部の「母」が叶韻し、魚部の「席」・「巨」が合韻する。「保」と「陳」、「守」と「及」、「巨」と「古」、「渴」と「飲」のあいだに方格を配し、それぞれに「君」・「宜」・「高」・「官」を一字ずつ入れる。

第一句の「是」は「氏」の假借。三角縁一二一四や景初三年・正始元年の紀年鏡銘にみるように、「陳氏」の三角縁神獸鏡は種類ごとに銘文の變異が大きく、異例な文言も多い。しかし、本鏡銘は三角縁〇八・〇九とほぼ共通し、ほかにも京大目録五八・六一・八二ほか同型式の銘文が數多く存在する。ただし、第三句は二字目の「有」が脱落し、末句は三角縁〇八の上四字を省略したもの。

兵庫縣たつの市の個人藏の三角縁吾作四神四獸鏡(目録番號なし)もほぼ同型式の銘文だが、第二句に「上有仙人不知老」を挿入し、第三句を「古有神守及龍席」とする。「古有神守」の句はほかに類例がなく、「上有神守」と「古有聖人」を對にすべきところ、先に「上有仙人」の句を配したための錯誤か。

### ●三角縁一一

吾作明竟甚大好。  
上有神人王父母。

吾れ明鏡を作るに、<sup>まじ</sup>甚に大いに好し。  
上に神人の王父母有り。

仙人赤侍左右。

仙人の赤（松子）は左右に侍す。

清龍巨眞會陽、

青龍・虎は陰陽に填ふ。

獨存惇生文章、

獨り存し、敦<sup>いか</sup>りて、文章を生ず。

常保尼亲不持。

常へに二親を保ち、止まず。

（注）

傳大分縣宇佐出土の三角縁吾作四神四獸鏡（京大目録二七）にみる「辰馬考古資料館・二〇〇九」。釋讀の困難な字句が多いが、七字句と六字句で構成され、幽部の「好」と之部の「母」・「右」・「持」が叶韻する。

第二句の「神人」は銘文四二二・四二三などに「上大山見神人」とあり、前漢には仙人を指していたが、本銘では「神人王父母」とあり、つづいて「仙人赤（松子）」とあるから、その「神人」は「仙人」ではなく「王父母」すなわち東王父・西王母を意味する。おそらく本句は三角縁〇八・一〇の「古有聖人東王父西王母」を改變したものである。三角縁一〇の注にあげた個人藏の三角縁吾作四神四獸鏡において「上有神守」を「古有神守」に改めたように、本句は「古有」を「上有」とし、「聖人」を「神人」に改めたのである。

『莊子』雜篇・外物の神人―聖人―賢人―君子―小人という序列でみれば、「神人」は「聖人」より一ランク上の最上位である。

第三句は三角縁〇六の「仙人王喬赤松子」の「王喬」と「松子」が脱落し、「侍左右」を加えたもの。東王父・西王母それぞれの左右に仙人の王喬と赤松子が侍従していることをいう。類似句として徐州系の銘文七〇三に「人有二仙在左右」がある。

第四句の「清」は「青」の假借で、「会」は「陰」の古文。「巨」は前後の文脈からみて「虎」の假借であろう。王力の古音説にもとづく郭錫良（一九八六）によれば、「巨」は「羣魚」、「虎」は「曉

魚」で音も近い。第四字について樋口隆康（一九九二）は「順」、笠野毅（一九九三<sup>a</sup>）は「貨」と讀むが、ここでは「眞」と釋し、「慎」または「填」の省字で「順」の意味と解釋する。『荀子』成相の「請布基、填聖人」の楊倞注に「填、讀爲順。」とある。青龍と白虎が陰陽をととのえる意味だが、銘文四四五に「左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽」とあるように、本來は青龍・白虎は不祥をしりぞけ、朱雀・玄武が陰陽をととのえる役割をもつ。

第五句はこれまで上三字が不明とされてきたが、「獨存惇」ではなからうか。『獨存』は『漢書』司馬相如傳の「大人賦」に「乘虛亡、而上遐兮。超無友而獨存。」とある。「惇」は「敦」の假借で、『說文』三下に「敦、怒也、詆也。」とあり、「いかる」意。類似句に銘文六〇五の「白帟喜怒母央咎」があるが、本銘ではなぜ「獨存」して怒るのか説明がつかない。なお検討を要する。

第六句の「尼」は「二」、「持」は「止」の假借（笠野毅・一九九三<sup>a</sup>）。

### ●三角縁一二

陳是作竟甚大好。 陳氏鏡を作るに、甚に大いに好し。

上有王父母。 上に王父母あり。

左有倉龍右白帟。 左に蒼龍有り、右には白虎。

宜遠道相保。 遠道に宜しく、相ひ保たん。

（注）

神奈川縣眞土大塚山古墳などの三角縁陳是作四神二獸鏡（京大目録一六）にみる。各字間に小乳を置くのは「陳氏」三角縁神獸鏡の特徴（小林行雄・一九七二）。また、各句の字数が揃わないものや本銘の第四句など特殊な用語が多いという特徴もある。幽部の

「好」・「保」と之部の「母」が叶韻し、魚部の「席」が合韻する。  
林分類 R<sup>a3</sup>。

第四句の類似句に銘文一〇三の「道路遼遠」や銘文二二四の「道路遠」があるが、いずれも遠く隔たった相手を想う抒情句であり、本銘とは前後の文脈が異なる。むしろ銘文四五二の「左龍右虎辟除道」、銘文五一六の「此竟好可自保。倉龍白虎主除道兮」、銘文五四二の「上有辟邪交龍。道里通」と同じように、本銘は前句の「左有倉龍右白虎」をうけて遠路の安全を祝願したものであろう。『抱朴子』内篇・登涉に「山無大小皆有神靈、……必有患害。……是以古之入山道士、皆以明鏡徑九寸已上、縣於背後」とあるのも、同じ觀念にもとづくのである。なお、東晉代に「明鏡徑九寸已上」という大鏡が存在した事實は確認できないが、直徑二二・〇センチの本鏡は、それにふさわしい大きさといえよう。銘文五四二の注を参照。

### ●三角縁一三

吾作明鏡真大好。 吾れ明鏡を作るに、真に大いに好し。  
浮由天下□四海。 天下に浮游し、四海に□。  
用青同。 清銅を用ふ。  
至海東。 海東に至らん。

### (注)

大阪府國分茶臼山古墳の三角縁吾作四神二獸鏡（京大目録一七）にみる。「吾作」ではじまるが、神獸像表現・配置、銘文、縁部の形態は、陳氏作鏡群の特徴をそなえる。三角縁一二と同じく、各字間に小乳を配するのは「陳氏」鏡の特徴。起句の前に四點記號があり、幽部の「好」と之部の「海」が叶韻し、第三句で換韻して「同」・「東」が東部で押韻する。

第一句は三角縁神獸鏡にはめずらしく「甚大好」ではなく、「真大好」と表記する。

第二句は三角縁〇四にもみられ、第五字は「至」だが、前漢の銘文四五〇では「浮游天下敷三海」とある。

第三・第四句は、三角縁神獸鏡の製作地をめぐる議論が多い。三角縁一四には「刑暮周刻用青同、君宜高官至海東」とあり、「海東」の指示するものをめぐって、魏から倭や朝鮮に銅鏡を贈與したことを意味するかと考える富岡謙藏（一九一六・一二〇～一二一頁）の説、鏡工人が日本列島に東渡した證據とみる王仲殊（一九八二）の説、東方の仙界を示すとする梅原末治（一九二二）らの説などがある。ただし、具體的な地域名としての「海東」は『魏志』東夷傳に「漢末、公孫度雄張海東」とあり、宮崎市定（一九九五）が指摘するように朝鮮北部をふくむ遼東を指している。また、この句は整った七字句である三角縁一四の「刑暮周刻用青同」と「君宜高官至海東」の下三字を取りだして継ぎ接ぎしたものであり（笠野毅・一九九四）、三字二句をつづけて意味をとる富岡説や王説は成立しがたい。  
銘帶の句のあいだに方格を配し、「君」・「宜」・「高」・「官」を一文字ずついれる。

### ●三角縁一四

鏡陳氏作甚大工。 鏡。陳氏作るに甚に大いに巧みなり。  
刑暮周刻用青同。 型模を彫刻し、清銅を用ふ。  
君宜高官至海東。 君は高官に宜しく、海東に至らん。  
保子宜孫。 子を保ち、孫に宜し。

### (注)

滋賀縣大岩山古墳の三角縁陳氏作神獸車馬鏡（京大目録一五）にみ

る。三角縁一二・一三と同じく各文字間に小乳をいれる。「陳氏」鏡獨特の大きな文字で、七字句を基本とし、「工」・「同」・「東」が東部で押韻する。

第一句は「陳氏作鏡甚大工」の「鏡」字が錯誤したもの。

第二句の「暮」は「莫」の古字で、「模」の省字ないし假借。烏根縣造山一號墳出土の方格規矩四神鏡〔森貞成・一九三九〕に「刑母雕刻用青同」（魏晉〇三）とあり、三角縁神獸鏡と魏晉鏡の近い關係を示している。「青同」も魏晉鏡に例が多い。魏晉〇二の注を参照。三角縁一三と同じく「用青同」があるが、本句は七字句として整い、上四字と下三字の意味も通じている。

第三句は四字の吉祥句の後ろに「至海東」の句を接續したもの。「至海東」については三角縁一三を参照。

第四句の「保子宜孫」は、三角縁神獸鏡のほかに魏晉鏡に多く用いられる。

また、山梨縣中道銚子塚古墳などの三角縁陳氏作神獸車馬鏡（京大目録二三）も、同様に「陳氏作」で「用青同」のほか「君宜高官」や「保子宜孫」を用いる點で共通性が高い。

陳氏作鏡用青同。 陳氏鏡を作るに、清銅を用ゐる。

上有仙人不知。

上に仙人有りて、（老いを）知らず。

君宜高官。

君 高官に宜し。

保子宜孫。

子を保ち、孫に宜し。

長壽。

長壽ならん。

### ●三角縁一五

吾作明鏡甚獨奇。

吾れ明鏡を作るに、甚に獨り奇なり。

保子宜孫富無訾。

子を保ち、孫に宜しく、富は訾る無し。

（注）

静岡縣松林山古墳（後藤守一ほか・一九三九）の三角縁吾作二神二獸鏡（京大目録一〇二）。これとほぼ同一の銘文が仿製三角縁神獸鏡にあるほか、河北省易縣から出土した方格規矩鳥紋鏡の魏晉〇五にもほぼ同一の銘文がある〔福永伸哉・一九九七／福永伸哉ほか・二〇〇〇〕。魏晉〇五の注を参照。

### ●三角縁一六

吾作明鏡甚大好。

吾れ明鏡を作るに、甚に大いに好し。

上右百鳥不知老。

上に百鳥有りて、老いを知らず。

今爲青竟日出卯也。

今清鏡を爲るに、日は卯に出づるなり。

（注）

奈良縣黑塚古墳一〇號鏡など三角縁吾作三神四獸鏡（京大目録四〇）にみる。逆字がとくに多い。整った七字句で「好」・「老」・「卯」が幽部で毎句押韻する。各文字の間に小圓圈文と三角紋を挿入する。

第二句の「右」は「有」の假借。「百鳥」は『吳越春秋』越王無餘外傳に「天美禹德而勞其功、使百鳥還爲民田」とあり、天から遣わされる種々の鳥をいう。また、山東省蒼山縣城前村出土の元嘉元年（一五二）畫像石題記（永田・六八）には「上有虎龍銜利來、百鳥共□至錢財」とあり、吉祥句にも用いられている。しかし、鏡銘としてはほかに例がない。

第三句の上二字は奈良縣立橿原考古學研究所（一九九九）と車崎（二〇〇二）は不明字とするが、林裕己（一九九八）は「今爲」と釋する。林説にしたがう。「青」は「清」の省字。「青竟」は太康四年（二八三）對置式神獸鏡（紀年鏡圖說・六朝一四）に「造作青竟」とあ



る。「日出」は銘文二四五に「日出大明」とあるが、「日出卯」は例がない。『晉書』天文志上に「春分日出卯入酉、此乃人之卯酉」とあり、「卯」は日出の方位、ひいては春分の慶事を示す。また、『論衡』言問時には「一日之中、分爲十二時、平旦寅、日出卯也。」とあり、日の出の時刻を指すこともある。いずれにせよ、作りだした清明なる鏡が日の出のごとく光り輝くさまを表現したもの。類似句に吳〇八の「王言昔者見、東方之光。日月之明」がある。末尾の助辭は鏡銘では「兮」がふつうだが、「也」としたのは銘文四三七の「大哉孔子志也」、吳〇九の「丁女共氏左日也」、吳一〇の「月日主天、可足□□也」など、ふつうの銘文とは異なる内容で、古雅なる趣きを帯びている。

### ●三角縁一七

惟念此竟有文章。

賣者老壽爲侯王。

上有申鳥在中央。

(注)

惟れ此の鏡を念ふに、文章有り。

賣<sup>あきな</sup>ふ者は老壽にして、侯王と爲らん。

上に神鳥有りて、中央に在り。

鳥取縣普段寺一號墳の三角縁惟念此銘唐草紋帶二神二獸鏡(京大目録九七)にみる。錢紋と唐草紋帶の内側に銘文をめぐらし、一字ごとに小圓圈をいれる。同型鏡が數面あるが、いずれも踏み返して銘文を消し、その上から斜格子紋で埋めている(樋口・一九五二)。「章」・「王」・「央」が陽部で毎句押韻する。

第一句の「惟」は「唯」と通じた發語の「これ」。銘文七四四に「惟此明竟、干出吳郡、張氏元公」とある。「有文章」は三角縁〇二の注を参照。

第二句の上四字は魏晉〇二や三角縁〇二では「買者受(壽)」と

あり、漢鏡銘では「買者……」がふつうだが、ここでは「賣者」となっている。「賣」は「贖」の省字または假借か。『說文』六下に「贖、買也。」とあり、「あきなう」意。物物交換においては「賣」と「買」とは同じ經濟行爲である。

第三句の「申」は「神」の假借。「神鳥」は三角縁一六の「百鳥」と同じものか。

### ●三角縁一八

吾有好同□且明。

神守仙人居中央。

今世以孫、

宜□侯王。

(注)

吾れ好き銅有り、□にして且つ明らかなり。

神獸・仙人は中央に居る。

今の世 孫まで率<sup>なま</sup>き、

□と侯王に宜し。

奈良縣鴨都波一號墳の三角縁吾有好同三神三獸鏡(京大目録九八・九九)にみる。小型で特異な神獸像の表現をもつ。銘帶に四個の小乳を配している。銘文の釋文は御所市教育委員會(二〇〇一)の報告を車崎(二〇〇二)が修正している。「明」・「央」・「王」が陽部で押韻する。

第一句は三角縁〇四と同様「好同」を用いる。第五字を報告は「清」、車崎は「青」かとする。「清且明」は吳鏡に多く、三角縁神獸鏡では三角縁〇一などにみられる。

第二句の「守」は「獸」の假借。「居中央」の前四字は「子孫備具」がふつうだが、本銘の「神獸仙人」は銘文五〇三の「白虎辟耶」、銘文五三一・五三三の「辟耶天祿」などにならったもの。

第三句の第一字を車崎は「令」とするが、字形は報告の「今」が妥當である。「以」は「率」または「與」の假借であらう。

●三角縁一九

日而月而美哉、  
日月天下之明。  
日と月は美しきかな。  
日月は天下を之れ明らかにす。

(注)

京都府久津川車塚古墳などの三角縁唐草紋帶四神四獸鏡（京大目録四二）にみる。唐草紋帶の途中に銘をいれた異例の配置である。梅原末治（一九二〇）は「日□而月□而吳□□母天下之明」と釋讀し、富岡謙藏（一九二〇）と同様これを仿製鏡とする。泉屋博古館（二〇〇四）は「日□而月□吳□□母天下大明」と讀むが、未讀字が少なくない。

第一句は「日・月・美」に助辭の「而」と「哉」をいれた形。「而」を字間に挿入することは、銘文二〇四の「内清質以昭明、光輝象夫日月」を變形させた、いわゆる昭明鏡の銘文に多い。日月の美しさを賞賛したその銘文は、時代は異なるものの、本句と通底している。

第二句は日月の輝きが天下を照明することをうたう。太陽の輝きをうたうのは、銘文二四二の「見日之光。天下大明」など前漢鏡に數多くの例がある。後漢代になると、そうした「天下」をふくむ表現は激減するが、漢鏡七期以降、銘文七一二の「明而日月世少有」、銘文七四三の「造爲明鏡、日月合萌」、吳〇八の「日月之明」、吳〇九の「日月光明何同火」、吳一〇の「王立青赤大竟、日月同光」、吳一二の「照下象日月、……丰日月之光」など、鏡の輝きを日月になぞらえる表現が頻出する。本銘はそうした鏡銘の流れのなかにあって、前漢鏡の銘文にならったものだろう。

●三角縁二〇

尙方作竟佳且好。  
明而日月世少有。  
刻治今守悉皆右。  
禽獸を刻み治め、悉く皆有り。

長保二親宜孫子。  
富至三公利古市。  
告后世。  
長く二親を保ち、孫と子に宜し。  
富は三公に至り、賈市に利し。  
後世に告げん。

(注)

奈良縣新山古墳四號鏡などの三角縁尙方作二神二獸鏡（京大目録一〇〇）にみる。斷面かまぼこ形の銘帶にほどこされた銘文で、幽部の「好」と之部の「有」「右」「子」「市」が叶韻する。林分類Qa。

三角縁神獸鏡では數少ない「尙方作」である。奈良縣佐味田寶塚古墳出土畫像鏡の銘文七〇八と第一―第五句までまったく同一で、佐味田鏡では第六句が「傳告后世樂未已」と整う。兩鏡は銘文のみならず、縁部形態や鈕座など紋様の諸要素にも共通性があり、三角縁神獸鏡と強い共通性を有する畫像鏡として注目されている（西田守夫・一九七一／笠野毅・一九九八）。

三角縁神獸鏡にはこのほかにも漢鏡に近似する銘文がいくつかある。新豐院山古墳群D二號墳などの三角縁吾作四神四獸鏡（京大目録五〇）には、

吾作竟自有紀。  
辟去不羊宜古市。  
上東王父西王母。  
吾れ鏡を作るに、自づから紀有り。  
不祥を辟去し、賈市に宜し。  
上に東王父・西王母有り。  
人をして長命なら令め、孫と子多からん。

とあり、大阪府郡川西塚古墳出土鏡などの銘文七一六とよく似ている。これは近接する時期の類似例だが、山口縣宮ノ洲古墳の三角縁王氏作盤龍鏡（京大目録六）には

王氏乍竟四夷服。 王氏鏡を作るに、四夷服す。

多賀國家人民息。 多く國家を賀し、人民息ふ。

胡虜殄滅天下復。 胡虜殄滅して、天下服す。

風雨時節五穀孰。 風雨時節あり、五穀熟す。

長保二親得天力。 長く二親を保ち、天祿を得ん。

とあり、王莽代の銘文四五四と酷似している。

# 参考文献

## 出典略號

鄂州……鄂州市博物館 二〇〇二『鄂州銅鏡』、中國文學出版社

鄂城……湖北省博物館・鄂州市博物館 一九八六『鄂城漢三國六朝銅鏡』、文物出版社

河北……河北省文物研究所 一九九六『歷代銅鏡紋飾』、河北美術出版社

巖窟……梁上椿 一九四〇～一九四一『巖窟藏鏡』

奇觚……劉心源 一九〇二『奇觚室金文述』

紀年鏡圖說……梅原末治 一九四三『漢三國六朝紀年鏡圖說』、桑名文星堂

京大目録……京都大學文學部博物館 一九八九『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』、奈良縣立橿原考古學研究所附屬博物館・京都大學總合博物館

二〇〇〇『大古墳展 ヤマト王權と古墳の鏡』に目録増補

久保惣……中野徹 一九八五『和泉市久保惣記念美術館 藏鏡圖録』、和泉市久保惣記念美術館

故宮……國立故宮博物院編輯委員會 一九八六『故宮銅鏡特展圖録』

故宮藏鏡……郭玉海 一九九六『故宮藏鏡』、紫禁城出版社

古鏡……羅振玉 一九一六『古鏡圖録』

五島……五島美術館學藝部 一九九二『前漢から元時代の紀年鏡』五島美術館展覽會圖録No.一一三

上海……陳佩芬 一九八七『上海博物館藏青銅鏡』、上海書畫出版社

小校……劉體智 一九三五『小校經閣金文拓本』

紹興……梅原末治 一九三九『紹興古鏡聚英』、桑名文星堂

西安……西安市文物保護考古所 二〇〇八『西安文物精華 銅鏡』、世界圖書出版西安公司

善齋……劉體智 一九三四『善齋吉金錄』

陳介祺……辛冠潔 二〇〇〇『陳介祺藏鏡』、文物出版社

永田……永田英正編 一九九四『漢代石刻集成』、同朋舍出版

樋口……樋口隆康 一九七九『古鏡』、新潮社

簠齋……陳介祺 一九二五『簠齋藏鏡』

六安……安徽省文物考古研究所・六安市文物局 二〇〇八『六安出土銅鏡』、文物出版社

K ……Karlgren, Bernhard 1934 Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6

日文・中文

阿部幸信 二〇〇五『燧人考』九州大學東洋史論集 三三三

殷光明 二〇〇六（北村永譯）『敦煌西晉墓出土の墨書題記畫像磚をめぐる考察』『佛教藝術』二八五號

上野祥史 二〇〇〇『神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰』『史林』第八三卷第四號

梅原末治 一九一九『所謂王莽鏡に就いての疑問——高橋健自氏の「王莽時代の鏡に就いて」を読む』『考古學雜誌』第一〇卷第三號

梅原末治 一九二〇a『久津川古墳研究』

梅原末治 一九二〇b『川岡村岡ノ古墳』『京都府史蹟勝地調查會報告』第二冊

- 梅原末治 一九二一「近江國野洲郡小篠原大岩山の古墳調査報告」『考古學雜誌』第一二卷第一號
- 梅原末治 一九二四「因伯二國に於ける古墳の調査」鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊
- 梅原末治 一九二五「揖保郡香島村吉島古墳」『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第二冊
- 梅原末治 一九三八「美作鄉村觀音山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』三、日本古文化研究所報告第九
- 梅原末治 一九四四「神獸鏡の「口銜巨」の圖様に就いて」『東方學報』京都第一四冊第三分
- 王蕊 二〇〇八『魏晉十六國青徐地域政局研究』、齊魯書社
- 王仲殊 一九八一「關於日本三角緣神獸鏡的問題」『考古』第四期
- 王仲殊 一九八五「吳縣、山陰和武昌——從銘文看三國時代吳的銅鏡產地」『考古』第一期
- 王仲殊 一九八六「青羊」爲吳郡鏡工考——再論東漢、三國、西晉時期吳郡所產的銅鏡」『考古』第七期
- 王仲殊 一九八九「論日本出土的吳鏡」『考古』第二期
- 大形徹 一九九二「松喬考——赤松子と王子喬の傳説について」『大阪府立大學紀要』人文・社會科學四〇卷
- 郭錫良 一九八六『漢字古音手冊』、北京大學出版社
- 何志國 一九九一「四川綿陽何家山一號東漢崖墓清理簡報」『文物』第三期
- 笠野毅 一九九三a「中國古鏡銘假借字一覽表（稿）」『國立歷史民俗博物館研究報告』第五五集
- 笠野毅 一九九三b「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第一三卷、雄山閣出版
- 笠野毅 一九九四「景初三年・『正始元年・景初四年の陳氏作鏡銘の解釋』『日本と世界の考古學——現代考古學の展開』岩崎卓也先生退官記念論文集
- 笠野毅 一九九八「三角緣神獸鏡は語る」『古代を考える 邪馬臺國』、吉川

弘文館

- 北野耕平 一九六七「古墳時代の枚方」『枚方市史』第一卷
- 車崎正彦 二〇〇一「新發見の「青龍三年」銘方格規矩四神鏡と魏晉のいわゆる方格規矩鏡」『考古學雜誌』第八六卷第二號
- 車崎正彦 二〇〇二「日本出土鏡（圖版掲載）銘文一覽」『考古資料大觀』第五卷 彌生・古墳時代鏡、小學館
- 車崎正彦 二〇〇八「御物の鏡」『王權と武器と信仰』、同成社
- 御所市教育委員會 二〇〇一「鴨都波一號墳調査概報」、學生社
- 後藤守一 一九二〇「銅鏡に就て（四）」『考古學雜誌』第一〇卷第五號
- 後藤守一・內藤政光・高橋勇 一九三九「靜岡縣磐田郡 松林山古墳發掘調査報告」、御厨村郷土教育研究會
- 小林行雄 一九七一「三角緣神獸鏡の研究——型式分類編」『京都大學文學部紀要』第一三
- 小林行雄 一九七九「三角緣波文帶神獸鏡の研究」『辰馬考古資料館 考古學研究紀要』I
- 小林行雄 一九八四「半圓方形帶神獸鏡について」（草稿）『泰遠寺山古墳』松岡町埋藏文化財調査報告書第一集
- 駒井和愛 一九四三「神獸鏡の「口銜巨」なる銘文とその圖様」『東方學報』東京第一四冊之二
- 近藤喬一 一九九三「西晉の鏡」『國立歷史民俗博物館研究報告』第五五集
- 櫻井達彦 一九八四・一九八五「王子喬・赤松子傳説の研究」『龍谷紀要』第六卷第一號・二號・第七卷第一號
- 山陰考古學研究所 一九七八「馬山四號墳」『山陰の前期古墳文化の研究』I 東伯耆I東郷池周邊、山陰考古學研究所記錄第二
- 昭明 一九九五「陝西鳳翔出土漢鏡舉要」『文博』第三期
- 西安市文物保護考古所 二〇〇九「西安東漢墓」、文物出版社
- 泉屋博古館 二〇〇四「泉屋博古」鏡鑑編
- 蘇奎 二〇〇八「四川邛崃發現的三段式神仙銅鏡」『文物』第七期

- 高槻市教育委員会 二〇〇〇『安満宮山古墳——發掘調査・復元整備事業報告書』高槻市文化財調査報告書第二一冊
- 高橋健自 一九一九「王莽時代の鏡に就いて」『考古學雜誌』第九卷第二二號
- 辰馬考古資料館 二〇〇九「吾作銘三角緣四神四獸鏡の修復」『辰馬考古資料館 考古學研究紀要』六
- 陳直 一九八八『文史考古論叢』、天津古籍出版社
- 鄭榮 一九八八「城固縣文化館藏銅鏡簡介」『考古與文物』第四期
- 東北博物館 一九五五「遼陽三道壕兩座壁畫墓的清理工作簡報」『文物參考資料』第二期
- 徳田誠志 二〇〇七「描かれた三角緣神獸鏡——『千とせのためし』所收 狩谷校齋舊所藏品について」『關西大學博物館紀要』第一三號
- 富岡謙藏 一九一六「日本出土の支那古鏡」『史林』第一卷第四號
- 富樫卯三郎 一九七八『向野田古墳』宇土市埋藏文化財調査報告第二集
- 奈良縣立橿原考古學研究所 一九九九『黑塚古墳 調査概報』大和の前期古墳Ⅲ、學生社
- 植山滿照 二〇〇七「後漢時代四川地域における「聖人」圖像の表現——三段式神仙鏡の圖像解釋をめぐって」『美術史』第一六三冊
- 南京市博物館 一九八七「南京獅子山、江寧素墅西晉墓」『考古』第七期
- 新納泉 一九八九「王と王との交渉」『古墳時代の王と民衆』古代史復元六、講談社
- 西田守夫 一九七一「三角緣神獸鏡の形式系譜緒説」『東京國立博物館紀要』六號
- 西田守夫 一九七六「三角緣神獸鏡の同范關係資料(三)」『MUSEUM』No. 三〇五
- 西田守夫 一九九三「三角緣對置式系神獸鏡の圖紋——『神守』銜巨と旄節と、乳をめぐって」『國立歷史民俗博物館研究報告』第五五集
- 林裕己 一九九八「三角緣神獸鏡の銘文——銘文一覽と若干の考察」『古

- 代』第一〇五號
- 林裕己 二〇〇六「漢鏡銘について(鏡銘分類概論)——樋口分類補正試論」『古文化談叢』第五五號
- 林裕己 二〇〇八「三角緣神獸鏡銘を通してみる方格規矩鏡β群——鏡銘からみた魏・晉鏡とその候補」『古文化談叢』第五九集
- 林巳奈夫 一九七三「漢鏡の圖柄二、三について」『東方學報』京都第四冊
- 林巳奈夫 一九七八「漢鏡の圖柄二、三について(續)」『東方學報』京都第五〇冊
- 林巳奈夫 一九八七「中國古代における連の花の象徴」『東方學報』京都第五九冊
- 樋口隆康 一九五二「同型鏡の二三について——鳥取縣普段寺山古墳新出土鏡を中心として」『古文化』第一卷第二號
- 樋口隆康 一九九二『三角緣神獸鏡綜鑑』、新潮社
- 福永伸哉 一九九二「規矩鏡における特異な一群——三角緣神獸鏡との関連をめぐって」『究班』埋藏文化財研究會一五周年記念論文集
- 福永伸哉 一九九四「魏の紀年鏡とその周邊」『彌生文化博物館研究報告』第三集
- 福永伸哉 一九九七「三角緣神獸鏡製作地の研究」『リポート』四一號、山陽放送學術文化財團
- 福永伸哉 一九九九「青龍三年鏡と顏氏の鏡作り」『邪馬臺國と安満宮山古墳』、吉川弘文館
- 福永伸哉・森下章司 二〇〇〇「河北省出土の魏晉鏡」『史林』第八三卷第一號
- 福永伸哉 二〇〇五『三角緣神獸鏡の研究』、大阪大學出版會
- 福原啓郎 一九九五『西晉の武帝 司馬炎』中國歷史人物選第三卷、白帝社
- 福山敏男 一九八一「銅出徐州」の徐州」『京都府埋藏文化財情報』第二號
- 福山敏男 一九八二「銅出徐州」の銅(その一)」『京都府埋藏文化財情報』



第三號

北京市文物工作隊 一九八三「北京市順義縣大營村西晉墓葬發掘簡報」『文物』第一〇期

星川清孝 一九七〇『楚辭』新釋漢文大系三四、明治書院

馬詠鐘 一九八八「陝西省博物館藏三國孫吳銅鏡」『文博』第二期

宮崎市定 一九八七「景初四年銘鏡は帶方郡製か」『洛味』四一四

森貞成 一九三九「出雲國能義郡荒島村出土の遺物について」『考古學雜誌』第二九卷第一二號

森博達 二〇〇三「音韻學から見た三角緣神獸鏡」『東アジアの古代文化』一一五號

森下章司 二〇〇四「古鏡の拓本資料」『古文化談叢』第五一集

森本六爾 一九二九「川柳村將軍塚の研究」、岡書院

矢田博士 一九九五「西晉期における《四言詩》盛行の要因について——「應詔・應令」及び「贈答」の詩を中心に」『中國詩文論叢』第一四集

雪野山古墳發掘調查團 一九九六「雪野山古墳の研究」

李新城 二〇〇六『東漢銅鏡銘文整理與研究』華東師範大學研究生博士學位論文

劉心健・劉自強 一九八三「山東蒼山柞城遺址出土東漢銅器」『文物』第一〇期

渡邊義浩 二〇〇七「西晉における五等爵制と貴族制の成立」『史學雜誌』第一一六編第三號

歐文

Bagley, Robert ed. 2001 *Ancient Sichuan, Treasures from a Lost Civilization*. Seattle Art Museum

挿圖出典

圖1 華西〇二 Bagley 2001, p. 328

圖2 華西〇六 西安市未央區出土 西安・六一

圖3 華西〇七 古鏡・中二七裏

圖4 華西〇八 馬詠鐘・一九八八・圖三

圖5 吳〇三 古鏡・中二八裏

圖6 魏晉一四附 古鏡・中一四裏

圖7 三角緣〇二 雪野山古墳發掘調查團・一九九六・報告篇圖六七